

愛知県立大学大学院

# 国際文化研究科

AICHI PREFECTURAL UNIVERSITY | 2020  
Graduate School of International Cultural Studies

共に学び、みずから学を磨く

——異なる価値観を結ぶ国際文化研究



# 共に学び、みずから学を磨く——異なる価値観を結ぶ国際文化研究

愛知県立大学大学院国際文化研究科案内 2020

AICHI PREFECTURAL UNIVERSITY | Graduate School of International Cultural Studies

## はじめに

国際文化研究科は、外国語・日本文化両学部をブリッジして作られた非常に守備範囲の広い大学院です。構成員はそれぞれの価値観を尊重し自由闊達に学び合い、人文社会諸科学の発展のため結び合います。

人文社会系での研究は集団でのプロジェクトもありますが、基本は個人研究です。本研究科でも、院生各自が研究テーマを絞り込む段階から、院生には多くの自由が与えられます。指導教員のテーマに縛られることはありません。しかし、自由であるということは一方で研究者としての自律、すなわち自らが選択した学術をやり抜くだけの覚悟と独立心が求められます。それは研究者としての存在価値をみずから証明することでもあり、決して楽なものではありません。院生にとって試行錯誤の連続となるでしょうが、その過程にこそ積極的な意義があります。なぜなら、研究者、専門職業人としての自立がそこで準備されるからです。

とはいつても、すべてにおいて自由に院生任せにしておくわけではありません。院生をサポートし、自立を助けるためのヒューマンな仕組みが充実しているところに、本研究科の大きな特長があります。自分の専門とする学術の意義を相対化し、多くの人びとに理解してもらうためには、共に学び、議論するプロセスが重要です。そもそも国際文化研究の要であるコミュニケーションとは、さまざまな言語による意思疎通であると同時に、研究者相互、そして研究者と社会との繋がり・交流としての意味を有します。そうした理解に立って、本研究科では、コミュニケーション能力の向上を目指し、必修科目を設置するとともに、近接分野の教員・院生が集う研究グループの取組みを推進し、更に併設の多文化共生研究所・通訳翻訳研究所を通じた地域・社会との結びつきを重視して、学び合いの中で構成員それぞれが成長できるよう努めています。

この冊子を手にとられたみなさんが本研究科への進学を希望し、やがて研究科コミュニティーの一員として共に学び、自らの学術を練磨し、大きな成長を遂げてくれることを切に願っています。



愛知県立大学大学院  
国際文化研究科長

大塚英二

## 国際文化研究科の概要

愛知県立大学大学院国際文化研究科は、外国語学部と日本文化学部の2つの学部組織を基盤とする大学院です。本研究科は、国際文化専攻および日本文化専攻の2専攻から成り立っています。国際文化専攻は外国の言語・文化・社会や国際社会などに関する研究、日本文化専攻は日本語・国文学や日本史・地域社会などに関する研究を行っています。両専攻は、中心的な研究領域を異にしていますが、自文化と異文化の理解にもとづいてグローバルな多文化共生に貢献するという意味では、共通の基盤に立脚しています。少人数教育により研究者や専門職業人の養成をめざしていることも、両専攻に相通じる特徴です。

### ● 沿革

1957年	愛知県立女子大学発足（母体は愛知県立女子短期大学）
1966年	愛知県立大学発足
1998年	長久手キャンパスへ移転 大学院国際文化研究科設置
2002年	大学院国際文化研究科博士後期課程設置
2009年	愛知県立大学と愛知県立看護大学が統合 大学院国際文化研究科に国際文化専攻と日本文化専攻を設置
2015年	国際文化専攻博士前期課程に英語高度専門職業人コースを設置

## もくじ

はじめに——研究科長 大塚英二

国際文化研究科の概要

沿革	
教育課程の特色	養成する人材像 02 博士前期課程 02 博士後期課程 02 修士論文・博士論文の題目例 03 修了後の進路 03 取得できる教員免許 03
研究科サポート体制	昼夜開講と長期履修制度 04 名古屋市立大学大学院との単位互換制度 04 院生のための施設・設備 04 キャリア支援室 04 奨学金制度 04 TA（ティーチングアシスタント）とRA（リサーチアシスタント） 05 日本学術振興会特別研究員（DC）制度 05 国際交流 05 大学院合同ゼミと研究グループ 06 多文化共生研究所との連携による研究支援 06 研究科論集と共生の文化研究 06
大学院合同ゼミ	国際文化特殊演習 07
研究グループ	多文化社会と言語 08 地域多様性のフィールド学 08 学際的フランス語圏研究 08 歴史学の潮流 09 人類学研究グループ 09 国際関係論の歴史的アプローチ 09 カタルーニャから考える地域と国家 09
国際文化研究科博士課程カリキュラム	博士課程カリキュラム 10 英語高度専門職業人コース 11
院生・修了生の声	院生の声 12 修了生の声 12
専攻研究分野と専任教員の紹介	国際文化専攻の教員紹介 13 日本文化専攻の教員紹介 25
多文化共生研究所	29
入試日程	

## 「特定課題研究成果」による 修士学位の授与

→ 02  
ページ

博士前期課程における研究の成果として、「修士論文」または「特定課題研究成果」が選択可能。

国際文化専攻

## 長期履修制度

→ 04  
ページ

働きながら、育児・介護をしながら学びたい人は、標準修業年限分の授業料で最長4年（博士前期課程）または5年（博士後期課程）かけて修了可能。

国際文化専攻 日本文化専攻

## 名古屋市立大学大学院との 単位互換制度

→ 04  
ページ

自分の専門を深めるために、名古屋市立大学人間文化研究科の科目履修で補うことができる。

国際文化専攻 日本文化専攻

## 大学院合同ゼミと研究グループ

→ 07  
ページ

問題関心の近い教員・院生が集まる学びの場。分野が異なる3クラスの合同ゼミを開講。

国際文化専攻 日本文化専攻

## 英語高度専門職業人コース

→ 11  
ページ

プロフェッショナルとして活躍できる高度な英語力（言語知識・運用能力）を身につける。英語専修免許の取得も可能。

国際文化専攻

## プレゼンテーション型入試 の導入

→ 日程は裏表紙

従来型の試験に加え、新しい入試制度を導入。自らのキャリアに基づく研究テーマや専門知識などをプレゼンテーションで表現。

国際文化専攻

詳細は令和2(2020)年度学生募集要項参照  
<https://www.aichi-pu.ac.jp/prospective/graduate/guide.html>



養成する人材像

博士前期課程では、自文化と多文化共生に関する理解を基礎として、国際社会および地域社会で活躍できる人材の養成を目指しています。専攻ごとに次のような特色があります。

国際文化専攻

外国語によるコミュニケーション能力と外国語で書かれた資料を扱う能力を十分に備え、国際社会および地域社会の諸問題に精確に対応できる人材を育てます。併せて、社会で求められる英語プロフェッショナルを養成する英語高度専門職業人コースが専攻内に置かれています。

日本文化専攻

グローバル社会を学術的に認識すると同時に、国際的な視野に立って自文化を深く掘り起こし、日本社会に生起する社会的・文化的諸問題を解決する能力のある人材を育てます。

博士後期課程では、前期課程で培った国際社会および日本社会に関する専門的知識と問題解決能力をより高度な次元で発揮し、大学・研究所で教育研究に携わる教職員、官公庁・企業等で活躍する専門職業人など、国際社会の第一線で活躍できる人材の養成を目指しています。

博士前期課程

本研究科では、豊富なスタッフによって、グローバル化時代における国際社会および、地域社会の国際化に対応した高度な教育研究を展開しています。

研究指導については、「国際文化研究」または「日本文化研究」を担当する主指導教員と、副指導教員の2名による指導体制がとられます。加えて、学際的な研究グループによる研究活動（7～9ページ参照）を通じて、他分野の教員からも広い視野に立ったアドバイスを得ることができます。

国際文化専攻

国際文化専攻は、右のような専門と研究分野から構成され、それぞれの分野の特性を生かした授業科目とともに日本文化専攻と共通した科目を置くことで、研究の原理的系統性と地域的包括性をともに得られるようにしています。世界の多くの地域、社会がカバーされており、国家・地域の区分にとらわれない国際的な視野のもと、共通のディシプリンで教育・研究が行われます。

2018年度より、修了要件となる最終課題については、「修士論文」「特定課題研究成果」のいずれかを選択できるようになりました。国際文化専攻では、学術の理論や体系の向上をめざす研究の成果物である「修士論文」のみならず、地域社会の課題解決をめざした政策提案、言語教育等に関する教授法の開発、学術的価値の高い外国語資料・作品の翻訳・解説、考古・民俗資料等の発掘・分析など、学術の利用価値を高めることを目的とする研究については、「特定課題研究成果」として取り組むことができます。

また、英語高度専門職業人コース（2015年度開始）では、英語専修免許の取得に必要な授業科目をはじめ、学士課程で培った英語の言語知識及び運営能力をプロフェッショナルとして活躍できる関にまで高め、洗練することのできる授業科目を配置しています。

日本文化専攻

日本文化専攻は、右のような専門と研究分野から構成され、それぞれの分野に特化した授業科目を設置しています。と同時に、国際文化専攻と共通した科目を置くことによって、日本という地域社会にとどまらない学術的一般性・原理性が得られるようにしています。こうして、日本文化研究を質的にも総合的に深化させることを目指します。

専門	研究分野
言語文化	言語研究
	文学文化研究
社会文化	国際社会研究
	地域社会研究

専門	研究分野
言語文化	言語研究
	文学思想研究
社会文化	歴史文化研究
	地域文化研究

博士後期課程

博士後期課程では、前期課程で培った人文社会科学分野での学際的な分析力と国際性に裏付けられた展開力という特色をさらに深め、グローバル化とローカルな動きが同時進行する世界と日本の趨勢に対応しながら、既存の学問的方法を超えるような、多面的で多様な視点をもって研究を進めます。

修士論文・博士論文の題目例

修士論文題目

国際文化専攻

- 早期英語教育に関心をもつ親の子どもの英語力に対する期待—グローバル時代に必要な英語力と学校英語科教育を考える—
- EPOと「EUの財政利益に影響を与える犯罪」—「刑事捜査および訴追に関する決定権限のEPOへの委譲」と「越境捜査に際する障害の除去」の分析を中心として—
- 異文化間教育の視点から見たホームステイプログラムのあり方—寮生活を送る留学生の週末滞在に着目して—
- 尖閣諸島「棚上げ」に関する考察
- フォホーを踊る人びと—在日ブラジル人の文化実践—
- 林語堂の東西文化論
- 学衡派と新青年派の「新文化」認識—梅光迪と胡適を中心に—

日本文化専攻

- 関宿の町並み保存の変遷
- 多元的な「郷土」概念に存立する地方郷土研究団体—昭和戦前・戦中期における飛騨考古土俗学会を事例に—
- 近世後期における御師の金融活動に関する一考察—津島御師氷室作大夫家の金融—
- 東アジアにおける律令の考察—隋律の復元を中心として—

博士論文題目

- 学校統合に伴うモンゴル民族教育の変容—中国内モンゴル自治区赤峰市を中心に—
- 日本中世地域社会構築史の研究
- メキシコ、テオティワカン遺跡「月のピラミッド」出土の土器に関する研究
- 中国「生態保護政策」および「定住化プロジェクト」の影響下におけるモンゴル族牧畜社会の動態に関する研究
- ヨーロッパの一体性を求めて—欧州統合へのイギリスの政府間主義的アプローチ
- 文字言語における体系と運用の諸問題—上代文字資料を中心に—
- 古代東アジアにおける漢字文化の研究
- 中国における「伝統」の継承、「再創造」、「移植」—内モンゴル自治区における「白いスウルデ」祭祀をめぐる—
- 工業デザイナー・クリストファー・ドレッサーの研究—19世紀日英の産業とデザインをめぐる—
- 天草版『平家物語』の原拠本、および語彙・語法の研究
- 白澤論
- ポスト社会主義モンゴルにおけるカザフ社会の動態に関する文化人類学的研究

修了後の進路

本研究科の修了者は、多文化共生社会の実現が求められる中、教育・研究機関、官公庁、民間企業、国際関係機関など、国際社会および地域社会のさまざまな分野で活躍しています。国内外の大学教員など研究者をはじめ、中・高等学校教員、大学図書館職員、地方自治体職員、一般企業、外国領事館職員など、多様な人材を輩出しています。

修了生の声→12ページ

大学教員（海外大学を含む）、大学非常勤講師 地方自治体職員、高校教員、中学校教員 公立学校事務員、大学図書館職員、本学後期課程進学 他大学後期課程進学、一般企業、外国領事館職員 など
--

取得できる教員免許

国際文化研究科の博士前期課程修了者は、下記の中学校および高等学校の専修免許が取得できます。

ただし、専修免許を取得できるのは、学部在学中に中学校または高等学校の一種免許状の授与を受け、またはその資格を有する方に限られます。

● 免許の種類および教科

中学校教諭専修免許状	英語・国語・社会
高等学校教諭専修免許状	英語・国語・地理歴史

### 昼夜開講と長期履修制度

本研究科では、昼間の通学が困難な社会人等に対しても、充実した教育を提供しています。

授業科目は、隔年で昼間（1～5限）と夜間（6・7限）の授業時間帯に開講することを原則としています（履修者の状況等による例外あり）。

本学では、働きながら大学院で学びたい人や育児・介護をしながら学びたい人のために、長期履修制度を設けています。通常の修業年限（博士前期課程は2年、博士後期課程は3年）に代えて、博士前期課程は最長4年、博士後期課程は最長5年の修業期間を申請することができます。長期履修制度を利用する場合、授業料は博士前期課程は2年分、博士後期課程は3年分を分割納入します。

#### ●博士前期課程1年 Kさん [業種：ソフトウェア開発]

私の入学のきっかけは、所属している業界で、中国や東南アジアをはじめとする外国人高度人材が急速に増えていることです。その中で管理者として、同僚として、文化背景の異なる人々とどう付き合っていけばいいのか、研究をする必要性を感じ、社会人として入学しました。

本学は院生が比較的少数であるため、大規模校では実現しにくい、中身の濃い議論が可能になっています。レジメ作成では、社会人ならではの情報収集力、分析力を活用して他の受講生の皆さんに新しい視点を提示できることでしょ。

研究グループは「多文化社会と言語」に属していますが、国文など全く異なる研究テーマを持つ方の発表を聞いて意見交換し、大変意義のある時間を過ごせています。

本学の最大の特徴として、夜間開講や長期履修制度があり、しかも1年生が終わるころまでに履修年数を決定すればよい、という柔軟な制度となっているところが非常にありがたいです。

自分に学ぶ気持ちがあれば、それに応えてくれるだけの環境があります。

### 名古屋市立大学大学院との単位互換制度

愛知県立大学大学院国際文化研究科は、名古屋市立大学大学院人間文化研究科との間で博士前期課程・博士後期課程に関する単位互換協定を結んでいます。本研究科の院生は、各自の専門に関わる学修を深めるために、指導教員の指導を受けたうえで、名市大の授業科目を履修することができます。名市大での履修科目は、本学の大学院学則・研究科履修規程が定める範囲内で、修了に必要な単位として認定することができます。

### 院生のための施設・設備

本研究科では、院生に対して適切な研究環境を提供すべく、図書館などの全学共用施設のほか、院生室、研究科所属院生専用の端末室、他研究科との共同談話室、印刷室を用意しています。また、各院生はコピーカードの貸与を受け、年間2,000枚まで使用することができます。

また、院生室には研究倫理審査を受ける研究の資料等を保管できる暗証番号式ロッカーがあり、各院生が利用できます。

### キャリア支援室

キャリア支援室では、専門相談員による就職相談を毎日開催しています。就職に関する相談はもちろん、ES・履歴書などの添削も行っています。就職に関する相談はサテライトキャンパス（ウインクあいち15階）でも実施していますのでぜひ利用してください。また、資格や就職に関する図書も設置しています。

求人検索 NAVI を利用することで、求人票の検索、就職相談の予約などを行うことができます。例年10,000件を超える求人票登録がありますので、積極的に活用してください。

### 奨学金制度

#### ●日本学生支援機構奨学金

第一種（無利子）		第二種（有利子）
博士前期課程	博士後期課程	博士前期・後期課程
50,000円 又は 88,000円 から選択	80,000円 又は 122,000円 から選択	50,000円、 80,000円 100,000円、130,000円 150,000円 から選択

#### ●その他奨学金

大幸財団、豊秋奨学会、横山育英財団など、各種奨学金の募集があります。詳細は、入学後に学生支援課で紹介します。

#### ●特に優れた業績による返還免除

大学院において日本学生支援機構第一種奨学金の貸与を受けた学生で、在学中に特に優れた業績を上げた者として機構が認定した場合には、貸与期間終了時に奨学金の全部または一部の返還が免除されます。

学問分野での顕著な成果や発明・発見のほか、文化・芸術・スポーツにおけるめざましい活躍、ボランティア等などでの顕著な社会的貢献なども含めて評価されます。本学においても、毎年、数名の院生が返還免除の認定を受けています。

### TA（ティーチングアシスタント）と RA（リサーチアシスタント）

TAは授業科目等の補助業務を行う制度で、博士前期・後期課程の院生を対象としています。RAは研究プロジェクト等における補助活動を通じて研究者としての経験を積む制度で、対象は博士後期課程の院生です。いずれにおいても、所定の給与が支給されます。本研究科では、TA・RAを積極的に活用することで、学部・大学院における教育研究の活性化を推進しています。

### 国際交流

#### ●海外留学

本学は、海外の約60の大学・機関と学術交流協定を結んでいます。学生の交換協定を結んでいる大学の多くは、大学院生の交換留学も可能となっています。協定大学への留学を通じて、研究者としての視野を拡げ、各自が専門とする地域の研究や専門分野に関する学問的理解を深めることができます。協定大学での修得科目は、本学の大学院が学則および研究科履修規程が定める範囲内で、修了に必要な単位として認定することが可能です。

#### ●協定大学・機関（2019年4月1日現在）

アメリカ	アシュランド大学、ニューヨーク州立大学フレドニア校 マイアミ大学キューバ研究所、アリゾナ州立大学 ポートランド州立大学、オッターベイン大学 プレスピテリアン大学 カリフォルニア州立大学チャンネルアイランド校	メキシコ	ラス・アメリカス大学プエブラ校、グアダハラハラ大学 メキシコ国立自治大学、プエブラ自治栄誉大学
イギリス	セントラル・ランカシャー大学、ニューカッスル大学	ペルー	ペルー・カトリカ大学
カナダ	ニューファンドランド・メモリアル大学 ケベック大学モントリオール校	ブラジル	サンパウロ大学
オーストラリア	スインバーン工科大学スインバーンカレッジ ディーキン大学、西オーストラリア大学 ウーロンゴン大学、オーストラリアン・カソリック大学	ドイツ	ケルン大学、ライプツィヒ大学、チュービンゲン大学 ミュンスター大学、リュネブルク大学
マレーシア	テイラーズ大学	中国	南京師範大学、四川師範大学、華東師範大学
フランス	リール大学、フランス政府留学局 トゥールーズ大学ジャンジョレス校、ロレーヌ大学	台湾	静宜大学、東呉大学
ベルギー	ブリュッセル自由大学	韓国	清州大学、韓国外国語大学、ソウル基督大学
スペイン	アリカンテ大学、サンティアゴ・デ・コンポステラ大学 ア・コルーニャ大学、ブンペウ・ファブラ大学 スペイン国際政治学研究所、CEU サン・パブロ大学 セビージャ大学、ラモン・リュイ学院	インドネシア	ガジャマダ大学
		ロシア	シベリア連邦大学、グラスノヤルスク国立医科大学
		ポルトガル	ミーニョ大学
		タイ	ナワミントラティラート大学
		ラオス	ラオス国立大学
		その他	UMAP（アジア太平洋大学交流機構） SAF（スタディ・アブロード・ファウンデーション）

### 日本学術振興会特別研究員（DC）制度

将来の学術研究を担う優れた若手研究者を養成するために、日本学術振興会が研究奨励金を支給する制度です。

#### ●博士後期課程満期退学 榎原真理子さん

博士後期課程の学生を支援する制度です。全国の院生が申請し、審査は狭き門ですが、特別研究員に採用されると3年間または2年間、奨励金および研究費を獲得することができます。博士前期課程1年時から早めに情報収集し、先生や先輩に指導・助言を仰ぎながら申請の準備を進めるとよいでしょう。この制度を活用すれば、存分に博士論文に取り組むことができ、課程修了後も更なる研究を広げていくことができると思います。

#### ●チューター・メイト制度

本学で受け入れる外国人留学生に対して、本学学生が生活や学修に関わる助言・支援を行う制度です。この制度を通じて学生は、交換留学生などが日本での生活に適應できるよう手助けするとともに、自分自身にとっても貴重な国際交流の経験を積むことができます。

#### ●海外協定大学とのダブルディグリー制度について

協定大学の一つであるサンティアゴ・デ・コンポステラ大学（スペイン）との間では、両大学の共同指導による博士論文作成に関する協定を結んでいます。希望する学生は、博士論文の共同指導・審査を受け、論文の内容等に関する所定の要件を満たし合格すれば、両大学の博士学位が授与される仕組みになっています。

## 大学院合同ゼミと研究グループ

国際文化研究科では、大学院合同ゼミ（正式科目名は「国際文化特殊演習」）を開くことで、院生に対する研究指導の効果を高めるとともに、院生どうしが学問的に刺激し合う研究活動の場づくりを進めています。この合同ゼミの枠組みで、現在、フィールド系を中心とする社会科学の分野、多文化状況と言語に関わる現代的な課題を研究する分野、文献史学の研究課題を史学史に照らして考える分野の計3クラスが開講されています。

大学院合同ゼミの運営を担っているのは、近接する分野の

教員・院生が集まる研究グループです。カリキュラム表の研究分野区分とは違って、研究の目的意識や中核的テーマで結ばれているのが研究グループの特徴です。現在、合同ゼミを運営している「地域多様性のフィールド学研究グループ」「多文化社会と言語研究グループ」「歴史学の潮流研究グループ」をはじめとして、合わせて7つの研究グループが存在します。

大学院合同ゼミと研究グループの具体的な紹介については、次ページ以降を参照してください。

## 多文化共生研究所との連携による研究支援

国際文化研究科では、大学院生たちの研究活動への参加を奨励しています。

本研究科には、附置の研究所として「多文化共生研究所」が置かれています。約40名の教員たちにより構成されている研究所ですが、院生教育の支援を事業の柱の一つとしています。研究所では、院生たちが研究活動に実際に参画できるよう、以下のような取り組みを進めています。

### (1) シンポジウム、研究会、講演会の開催

ゲストを招いて学術行事などを開催する際に、院生対象の授業を兼ねて行うことにより、学内外の第一線の研究に触れることができる機会としています。院生が、アシスタントとして学術行事を支えるスタッフとなることもあります。

### (2) 学会発表のためのスキルアップ支援

近年の学会では、ポスター形式で発表を行う機会が増えていきます。国内外の学会に参加・発表する院生たちの要望に応える形で、ポスター発表の作成方法を指導し、院生有志グループとともに学内でポスター発表会を開催しています。院生は、学会でのポスター発表の予行演習の経験を積むことができます。大学院演習「国際文化特殊演習」（大学院合同ゼミ）も授業の一環として合流し、院生たちが授業で学んだ成果を公開する機会を提供しています。

## 研究科論集と共生の文化研究

本研究科の紀要として、『国際文化研究科論集』を毎年発行しています。博士後期課程の在学学生で指導教員の推薦を受けた人、博士前期課程修了者のうち、修士論文で優秀な成績を修め、掲載許可の認定を受けた人は、研究科論集に論文等を投稿することができます。

### (3) 論文・書評の執筆指導と公開の奨励

研究所は『共生の文化研究』という雑誌を毎年刊行しています。この雑誌に、院生たちの投稿を奨励しています。たとえば、大学院授業で書評執筆のトレーニングを受けた院生たちのなかで、優秀な作品を執筆した人に対し、同誌の書評が自ら研究、執筆、校正し、成果を公開する経験を積むとともに、業績を蓄積していくことができる媒体として、同誌を活用しています。また、フィールドワークなどの調査を経験した院生などが、指導教員の助言のもと、この雑誌に寄稿することも奨励しています。雑誌は冊子体で刊行されるとともに、ウェブ上でも公開されるため、本学における成果発信の一端を、院生たちが担っていることとなります。

### (4) その他

以上のほか、院生たちが研究所の用務をアシスタントアルバイトの形でサポートしたり、雑誌編集の実務を仕事として経験したり、映像制作実習などの形でフィールドワークのスキルアップの機会を得たりするなど、大学院教育と研究所の連携は幅広い形で実践されています。

授業や論文指導で教育を受けるのみならず、実地における研究活動の一端を担うという形で、経験の蓄積を通じた研究の世界への参画を促すのが、本研究科の特色です。

また、本研究科に附置されている多文化共生研究所（29ページを参照のこと）では、研究所のジャーナルとして『共生の文化研究』を発行しています。博士前期課程の学生でも、指導教員の指導にもとづいて、論文や調査レポートなどを投稿することができます。

## 国際文化特殊演習

国際文化  
特殊演習

a  
クラス

本合同ゼミは、人類学研究グループとの協力により運営されている。博士前期課程院生の研究発表を中心に、博士後期課程院生や本研究科の教員、関連分野の学外研究者などの報告を聞き、議論を通じて学ぶことができる。

- **対象分野**  
フィールド系を中心とする社会科学の分野（地理学、人類学、社会学、政治経済学など）
- **運営の中心となる研究グループ**  
地域多様性のフィールド学
- **2018年度の報告テーマ**
  - 近代日本の工業化を担った人々—明治大正期尾西地方の織物工場主の特性
  - 宗教的連帯としてのエコビレッジ
  - Erasmus Mundus Master Course on Maritime Spatial Planning
  - フォークを踊る人びと—在日ブラジル人の文化実践
  - 昭和戦前期における地方郷土研究団体についての研究—飛騨考古土俗学会を事例に
  - フランス語圏西アフリカにおける手話言語・ろう者コミュニティの研究
  - 関宿の町並み保存の変遷
  - テオティワカン土器サンプルの分析—「石柱の広場」複合体出土の土器群を対象に

国際文化  
特殊演習

b  
クラス

本合同ゼミでは、月2回のペースで研究発表をおこなっており、さまざまなテーマで、積極的な議論の場となっている。大学院生5名教員4名に加え、テーマに応じて、数名の教員や院生がオブザーバ参加している。

- **対象分野**  
社会言語学、言語教育学、異文化コミュニケーション、エスニシティ、多文化共生
- **運営の中心となる研究グループ**  
多文化社会と言語
- **2019年度の報告テーマ**
  - 外国人エンジニア向けに最適化された異文化理解と日本語教育のプログラム体系化
  - 田村隆一研究
  - Society 5.0時代の多文化共生課題～多文化防災、医療通訳、異文化介護を中心に～

国際文化  
特殊演習

C  
クラス

本合同ゼミは、文献・考古・美術・思想などを素材に、時代と地域を問わない対象を扱っている。博士前期課程院生の研究発表を中心に、博士後期課程院生や本研究科の教員、関連分野の学外研究者などの報告を聞き、議論を通じて学ぶことができる。

- **対象分野**  
歴史学を中心とする人文科学の分野
- **運営の中心となる研究グループ**  
歴史学の潮流
- **2018年度の報告テーマ**
  - 企業の移動と地域社会・地方行財政
  - 争点を探る・前近代日本の宗教史
  - クロアチアにおけるナショナリズムの変化
  - 「弘安祈願の鐘」をめぐる
  - 西洋美術史のなかのメキシコ・ルネッサンス
  - 『病草紙』の歴史学—院政期の医学と文化—
  - メキシコ人にとっての骸骨美術とは何なのか
  - 台湾の同性婚いま—性の多様性の承認か、あるいは否定か—

## 多文化社会と言語

代表：東 弘子

人やモノ・情報が簡単に国境を越えて移動する現代において、世界各地で社会の多文化化・多言語化が進んでおり、日本も例外ではない。本研究グループでは、社会言語学、言語教育学、異文化コミュニケーション、エスニシティ、多文化共生といった立場から、主に日本国内の多文化状況と言語にかかわるさまざまな現代的な課題を取り上げ、調査・分析を進める。具体的には、地域社会とエスニック集団の動態、多文化共生施策の研究、コミュニティ通訳、情報保障、外国にルーツを持つ人びとへの日本語（学習）支援、などが課題となる。

- 異文化間教育の視点から見たホームステイプログラムのあり方：寮生活を送る留学生の週末滞在に着目して（2018）  
 ○顔文字の構成：インターネットにおける非言語コミュニケーションとしての顔文字（2017）  
 ○「非定型作品」から見る言語の芸術的機能（2017）  
 ○日本語における判断保留表現の真意を探るストラテジー：生命保険営業場面を事例として（2017）  
 ○地域社会の外国人自助組織が持つ役割：愛知県東浦町のフィリピン人自助組織 United Filipino Community in Higashiura の事例から（2017）  
 ○公共交通機関における多言語表示：名古屋市営地下鉄の駅を事例として（2016）  
 ○外国人労働者に対する受入国における言語教育：諸国との比較から見る日本の技能実習制度に関する考察（2015）

## 地域多様性のフィールド学

代表：竹中克行

本研究グループは、人・情報・資本が飛び交うグローバル世界における地域の動態を明らかにし、環境・文化・社会が複合する地域多様性を培うための研究実践に到達することを大きな目標としている。研究の方法論として、地理学、地域社会学など、フィールド調査に重きを置く現場主義を共有し、人類学研究グループと協力して、大学院合同ゼミ「国際文化特殊演習（αクラス）」を運営している。

- 多核型コンパクトシティとしてのサンティアゴ・デ・コンポステラ都市圏（スペイン）の特質—都市形態・機能分析より  
 ○ガイドブックからみるバルセロナの都市イメージの変化—バルセロナモデルの評価に関する新たな視点  
 ○関宿の町並み保存の変遷  
 ○常滑における観光と生活の共存について—地理学的アプローチ  
 ○地域社会と移動に関する研究—「係累のない土地へ自発的に移動する人々」がもつ帰属意識の変容  
 ○オタクについての研究—「オタク」における他者である「一般人」  
 ○多元的な「郷土」概念に存立する地方郷土研究団体—昭和戦前・戦中期における飛騨考古土俗学会を事例に

## 学際的フランス語圏研究

代表：中田晋自

本グループでは、フランス語圏の歴史、文学、文化、芸術、思想、言語、政治、経済、社会などを研究対象とする大学院生を広く受け入れ、当該院生が本グループの教員による学際的なフランス語圏研究の授業やゼミを受講するなかで、フランス語文献の読解力をはじめとするフランス語の運用能力はもとより、フランス語圏に関する幅広い知識を習得し、より学術水準の高い修士論文や特定課題研究の作成・提出を目指している。

- 構成員  
 国際文化専攻  
 ●中田晋自 [政治学(フランス都市政治研究)]  
 ●天野知恵子 [フランス近現代史、フランスの子ども・家族・学校の歴史]  
 ●佐藤久美子 [フランス文学、文学批評]  
 ●野内美子 [EU、フランス経済]  
 ●原 潮巳 [フランス語圏文学・文化]  
 ●伊藤滋夫 [フランス中世・近世史、財政史研究、公債の研究]  
 ●長沼圭一 [フランス語学]  
 ●岸本聖子 [フランス語学、認知意味論]  
 ●白谷 望 [モロッコ政治、中東・北アフリカ地域研究、比較政治学]

## 歴史学の潮流

代表：上川通夫

歴史学には本質的にグローバルとローカルの視点がある。世界史的な比較、接触地域間の連関確認、日常生活における普遍性の発見、などである。そのこと考えなくても考証論文は書ける。とはいえ、史料に付着する主観、先行研究の認識枠組み、研究主体の世界観などから自由になるには努力がいる。そこで、「すべての歴史的認識は現代史的認識である」という鉄則にあらためて向き合い、研究潮流の由来と問題を掘り下げ、歴史学の行方を考えたい。

## 人類学研究グループ

代表：亀井伸孝

フィールドワークに根差した文化人類学的研究を中核分野としつつ、自然人類学、言語人類学等を含む「総合人類学」の幅広い見地と素養のもと、人間理解を進めることを目指す。これらは、人文社会諸科学の基礎を成す認識と知識であり、文化人類学の専門性を高めたい学生のほか、社会学や言語学、地理学などの隣接分野の専攻学生の参入を歓迎する。社会調査の技法と倫理に習熟し、自ら調査を実践できる人材を目指すとともに、研究成果の社会還元、公共性を念頭に置いた知識の実践的活用に関心を向けた議論を行う。

## 国際関係論の歴史的アプローチ

代表：奥田泰広

21世紀の世界秩序は、アメリカの相対的優位が後退するなかで大きく変容する可能性を秘めている。そうしたなかで世界秩序の将来を見据えようとすれば、従来の国際関係論の手法にとどまることなく、これまで以上に歴史研究の蓄積を踏まえたマクロな考察が必要となってくる。この研究グループは、歴史研究のこれまでの成果を生かしながら、現在さらには将来をも意識した世界秩序の分析を行う。

## カタルーニャから考える地域と国家

代表：奥野良知

典型的な国民国家とされるフランスと国民形成にいわば失敗した国とされるスペインの両者にまたがって位置するカタルーニャは、ヨーロッパの多様性、スペインやフランスの多様性を今に伝える存在で、国民国家・地域・マイノリティーナショナリズムというような問題を考えるうえで、とても貴重なフィールドだといえる。また、同地は強い集合的アイデンティティを有する地域であると同時に、相対的に多様性と寛容度の高い社会だとも言われている。本研究グループでは、社会言語学や地理学や歴史学などの近接する多様な分野

- 構成員  
 日本文化専攻  
 ●上川通夫 [日本中世史、ユーラシア世界の中の日本中世]  
 ●大塚英二 [日本近世史、農村社会論、地域研究、用治水研究]  
 ●中西啓太 [日本近現代史、地方行財政研究、地域社会研究]  
 ●樋口浩造 [日本思想史、思想史文化理論]  
 ●丸山裕美子 [日本古代史、日唐比較文化研究、古代祭祀制度研究]  
 国際文化専攻  
 ●奥野良知 [近代カタルーニャ史・カタルーニャ地域研究]  
 ●久田由佳子 [アメリカ近代史、建国初期～南北戦争前の社会史・家族史・女性史]

- 構成員  
 国際文化専攻  
 ●亀井伸孝 [文化人類学、アフリカ地域研究]  
 ●秋田貴美子 [文化人類学、日米文化、女性学]  
 ●奥野良知 [近代カタルーニャ史・カタルーニャ地域研究]  
 ●谷口智子 [宗教学、ラテンアメリカ地域研究]  
 ●エドガー・ライト・ポーブ [民族音楽学、日本とアメリカのポピュラー音楽史]

- 構成員  
 国際文化専攻  
 ●奥田泰広 [イギリス政治・外交、国際関係史]  
 ●木下郁夫 [国際機構・国際紛争、外交関係]

- 構成員  
 国際文化専攻  
 ●奥野良知 [近代カタルーニャ史・カタルーニャ地域研究]  
 ●糸魚川美樹 [スペイン語圏社会言語学、スペイン語教育]  
 ●竹中克行 [地理学、地中海都市・ランドスケープ研究]



## 院生の声

### ●国際文化専攻 博士前期課程 2年 請川真弓さん



教職課程を履修する中で教育と政治・行政とのかかわりに関心を持つようになりました。本学フランス語圏専攻の卒業論文で扱ったフランスの移民教育政策のひとつを引き続き大学院の研究テーマとし、フランスの国家統合のあり方や、移民送り出し国の政治的関係性が国内の教育政策にどう作用しているかについて考察しています。修了後は、行政面から教育を支えることに何か貢献できればいいなと思っています。

大学院の授業は、専門とする地域も時代も学術分野も異なる院生たちと議論する授業と、自分が研究対象とする地域をこ専門とされている先生と1対1で行う授業とに分けられます。前者は、専門が多様多様であるからこそ得られる知識・観点があり、後者は、自分の研究テーマに合わせて授業内容を考えていただけるという利点があります。さらに研究グループ「学際的フランス語圏研究」では、フランス語圏のあらゆる学術分野をご専門とされる先生方から複眼的にご指導していただいています。ざっくばらんな雰囲気でもとても楽しい時間です。強力な後ろ盾が何人もついてくれるような感覚で、非常に心強いです。

### ●日本文化専攻 博士前期課程 1年 下廣日向さん



本学の国語国文学科を卒業後、進学しました。私の専攻は日本近現代文学ですが、国際文化研究科には、多様な分野の院生や先生方が集まる授業があり、それぞれの専門知識を持ち寄って幅広く議論します。そんな活発なつながりから、専門分野にも、自分自身にも、また現代の問題にまで思わぬ再発見があり、日々、考えの深まりを感じています。自らの研究を楽しみながら広げ、高めてゆくに、たいへんよい環境であると思います。

## 修了生の声

### ●国際文化専攻 博士前期課程修了生

加藤正明さん(シーナカリンウィロート大学日本語常勤講師)



1983年に愛知県立大学を卒業し、機械メーカーでの貿易業務、保険会社での営業の仕事を経て、2015年より社会人院生として国際文化研究科に入学しました。定年後は海外で日本語教師として勤務する夢を以前から持っていたので、時間に追われ厳しい毎日の連続でしたが、その夢の実現に向けて邁進することができました。

日本語教育学研究をはじめとした各種教育学・言語研究、また多文化共生の考えを深める多文化共生論や国際文化特別演習は、自分の視野を大きく広げることにつながりました。長期履修制度を利用して3年間の大学院生活を終え、退職とほぼ同時期にバンコクの大学で日本語教員の職に就くことになりました。様々な文化や言語・民族が混沌とつつも一つの国となっているタイで、日々学生たちと接する生活は、大学院の学びで広がった自分自身の視野をますます広げていると確信しています。

### ●国際文化専攻 博士前期課程修了生 鷲野明美さん(日本福祉大学勤務)



1997年に文学部社会福祉学科を卒業した後、社会福祉士として町役場に勤務し、2007年に社会人院生として国際文化研究科に進学しました。仕事をしながら学ぶということは大変な面もありましたが、アットホームな校風と熱心かつ親切な先生たちに恵まれたおかげで、学業と仕事を両立させることができました。在学中には、かねてから問題意識を持っていた我が国における高齢受刑者の社会復帰に向けた支援のあり方に関して、「ドイツにおける高齢受刑者の処遇について～Baden-Württemberg州 Konstanz 刑務所 Singen 支所と Hessen 州 Schwalmstadt 刑務所 Kornhaus での取組みより～」をテーマに研究し、更に専門的な研究を行うため、修了後は中央大学大学院法学研究科博士後期課程に進学し、2019年3月に博士(法学)の学位を取得しました。また、2013年に大学教員となり、社会福祉士を目指す学生の指導にあたるなど、充実した日々を送っています。今の私があるのは、国際文化研究科で社会人として学んだおかげです。母校愛知県立大学、そして、先生方、学友の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

### ●日本文化専攻 博士後期課程修了生 栗田佳美さん(武豊町役場勤務)



私は学部と大学院を愛知県立大学で過ごしました。日本中世史を専門にして、大学院在学中に、国際文化研究科論集や学外研究誌に論文を公表しました。その過程で、普門寺(豊橋市)や大御堂寺(美浜町)などで古文書を調査し、愛知県史や三重県亀山市史の編集事業のお手伝いにも参加しました。

思い返せば、美浜町の自宅から片道2時間以上の通学を、10年間続けたことになりました。それが持続できたのは、県大こそ私にとっての学びの拠点だという思いがあったからです。そこで身につけたのは、「研究心」であったように思います。

子育て真っ最中の今、公務員の仕事を創造的に、この「心」を活かすつもりです。遠きにおいて思う県大にも、また学びに訪れたいという実感です。

### ●国際文化専攻 博士後期課程 3年 市川浩代さん



愛知県立大学スペイン学科の卒業でピカソの「ゲルニカ」をテーマに選びました。中学時代から絵画に興味を持っていました。鑑賞的立場から制作へと、より直接的なかかわりを求めて、愛知県立芸術大学油画科に入学し卒業、日本に於ける美術教育の実態を体験しました。しかし、明確な造形の理論や表現に関わる自身の理解が得られないまま大学の課程を修了してしまいました。この事をきっかけとして古典的な技法や論理的な基礎造形の講義の充実しているスペインのマドリッド コンプルテンセ大学大学院修士課程に入学、修了。そこで、西洋絵画の伝統技法と基礎造形教育のシステムが確立

されていた、スペイン サンフェルナンド王立美術学校のカリキュラムを伝える技法書のシリーズと出会いました。このテキストの読解と分析が本学に於ける博士課程の研究テーマです。

居心地の良い環境で研究できることは幸せです。

### ●日本文化専攻 博士後期課程 3年 加藤 彩さん



国際文化研究科における日々は、「つながり」による面白さに満ちています。様々な研究分野で活躍される先生方とのつながり、それぞれの生活を抱え独自の研究テーマに取り組み仲間とのつながり。その中で、中島敦作品の短歌(韻文)と小説(散文)のつながりに注目し研究する私が発見した些細な何かが、思わぬところへつながり、見たことのない世界の片鱗が顔を出します。この面白さこそが、本研究科における醍醐味であり、混沌とした世の中で生きて行くための力になると思います。

### ●国際文化専攻 博士前期課程修了生 李娟さん(株式会社ライフサポート 勤務)



中国で大学のビジネス日本語学科を卒業後、日系企業に通訳として就職しました。学校教育で学んだビジネス日本語を、実際に仕事の中に運用する際、戸惑いを感じたため、日本語学校を経て2013年に県大大学院の国際文化研究科に入学しました。

国際文化専攻は大きく言語文化と社会文化の二つの専門科目に分けられ、自専攻だけでなく、他専攻の講義も受講することができるため、自分が興味を持った分野の知識を身につけることができました。また、少人数で講義が行われたため、院生同士で意見を交換しあい、先生方にも丁寧に指導していただきながら、研究を進めることができました。特に、院生として学部科目「日本語教育実習(国外)」に参加し、学習者の立場から授業及び教育手段を考えることの大切さに気づきました。修士2年の時、外国人技能実習生に日本語を教える機会があり、講義と実習で学んだことの応用に辿り着きました。

修了後、飲食業界を経て、現在は、年々少子化の影響で人材不足となっている日本企業とアジア人材を繋ぐコーディネーターを務めています。グローバル化する日本社会で、大学院での学びが役立っています。

### ●日本文化専攻 博士前期課程修了生 上嶋綾音さん(愛知県公立大学法人 勤務)

国際文化研究科では、自分の研究分野以外の科目を履修する必要があります。私は自分の研究分野(日本史学)以外には興味がなかったため、専門分野以外の授業を履修することが最初は不安でした。しかし、実際に授業を受けてみると、多くの刺激があり、自分の研究の種となりました。他の研究分野の学生と一緒に授業を受けることで、まったく違った研究の切り口・ものの見方に触れることができます。学部卒業後は自分が思う以上に研究論文を読む力がついていますので、さまざまな分野の研究論文を読み、そのおもしろさに気づくことができます。心配せずにチャレンジしてください。設備に関しては、大学院生専用のパソコン室・院生室があり、大学で研究に集中できます。私は授業が無くて、ほぼ毎日夕方まで院生室で授業の課題や自分の研究を進めていました。他の研究分野の学生、そして留学生や社会人学生と共に学ぶことで、研究のみならず、世界の多様性に触れることができ、人間として成長できる場だと思っています。

### ●日本文化専攻 博士後期課程修了生



服部光真さん(公益財団法人元興寺文化財研究所研究員)

国際文化研究科では、学問的刺激に満ちた、厳しくも楽しい日々を過ごしました。指導教員の先生からは、専門研究に関するご指導はもちろんのこと、調査の段取り、学会発表の準備、投稿論文の作成など様々な局面できめ細いご助言を受けることができました。また、隣接諸分野の先生方や院生との距離も近く、日常的な交流や共同研究を通して人文・社会科学の課題についての視野を広げられ、自分の研究の問題意識にも広がり深みを得ることができたことも大きなメリットだったと思います。基本的には自主性を重視して

ただけるので、研究者としての自立に向けて、良い緊張感を持って、自由に、主体的に、研究に専心できる場です。

## 国際文化専攻 (令和2年4月予定) Department of International Cultural Studies

	D	M	参照頁
<b>言語研究</b>			
教 授	東 弘子	日本語学、社会言語学	主
	池田 周	英語教育学、応用言語学	副 主
	石原 寛	英語学、古英語、英語文献学	副
	江澤 照美	スペイン語教育学、スペイン語学	主
	大森 裕實	英語学、歴史言語学、応用言語学	主
	熊谷 吉治	英語学、情報構造と韻律論	副
	櫻井 健	言語学、北欧語学、言語変化・言語接触	副
	高橋 慶治	キナウル語記述研究	主
	月田 尚美	言語学、形態論、台湾原住民諸語	主
	長沼 圭一	フランス語学	副
	中村 不二夫	英語学、英語史、近代英語統語論	主 主
	人見 明宏	ドイツ語学・文法、テキスト言語学、統語論	副
	広瀬 恵子	英語教育学、第二言語ライティング研究	主 主
	宮谷 敦美	日本語教育学	副
	森田 久司	英語学、言語学、統語論、意味論	主 主
准教授	糸魚川美樹	スペイン語圏社会言語学、スペイン語教育	副 主
	岸本 聖子	フランス語学、認知意味論	副
	袖川 裕美	日英同時通訳・通訳研究、コミュニケーション論	副
講 師	楊 明	現代中国語文法、日中対照言語学、中国語教育	副
	袁 曉今	中国語学、語構成論、生成語彙論	副
<b>文学文化研究</b>			
教 授	梶原 克教	英語圏文化、批評・理論	副 主
	川尻 文彦	中国近代思想	副 主
	木全 滋	アメリカ文学、ホイットマンと19世紀文学	副
	工藤 貴正	中国近現代文学、日・中・台比較文化文学	主 主
	平井 守	ドイツ文学、ゲーテ	副
	村山 瑞穂	アメリカ文学・文化、ジェンダー論、多民族・多文化主義	主
	山本 順子	ドイツ文化、表現主義とダダイズム、知覚変容論	主
	榎本 洋	ヴィクトリア朝文学文化(イギリス絵画)、ディケンズ	副
	佐藤 久美子	フランス文学、文学批評	副
	准教授	原 潮巳	フランス語圏文学・文化
三原 穂		18世紀英文学、文献学	副
四ツ谷 亮子		ドイツ文学、現代演劇、舞台芸術論	副
講 師	瀧内 陽	20世紀イギリス児童文学	副
	田邊まどか	スペイン文学	副
<b>国際社会研究</b>			
教 授	木下 郁夫	国際機構・国際紛争、外交関係	主
	小池 康弘	ラテンアメリカ政治・外交、キューバ研究、国際協力論	主
	今野 元	ヨーロッパ国際政治史、ドイツ政治思想、日独関係史	副 主
	中田 晋自	政治学(フランス都市政治研究)	主 主
	野内 美子	EU、フランス経済	副
	奥田 泰広	イギリス政治・外交、国際関係史	副
	アンドレア・カールソン	コンピュータを利用した語学学習、社会心理学、多文化コミュニティのためのメンタルヘルス支援	副
	高阪 香津美	ポルトガル語教育、多文化共生	副 主
	杉原 周治	ドイツ法、憲法学、メディア法	副 主
	鈴木 隆	現代中国政治・中国共産党研究	副
准教授	西野 真由	現代中国経済、中国のフードシステム研究	副
	山口 雅生	国際経済学、日本経済	副
	山下 朋子	国際法	副
<b>地域社会研究</b>			
教 授	天野 知恵子	フランス近現代史、フランスの子ども・家族・学校の歴史	主 主
	奥野 良知	近代カタルーニャ史・カタルーニャ地域研究	副
	亀井 伸孝	文化人類学、アフリカ地域研究	主 主
	黄 東蘭	中国近現代史・近代日中関係史	主 主
	竹中 克行	地理学、地中海都市・ランドスケープ研究	主 主
	谷口 智子	宗教学、ラテンアメリカ地域研究	副 主
	半谷 史郎	ロシア研究(特に20世紀のソ連史)	副
	久田 由佳子	アメリカ近代史、建国初期～南北戦争前の社会史・家族史・女性史	副
	エドガー・ライト・ポーブ	民族音楽学、日本とアメリカのポピュラー音楽史	副
	秋田 貴美子	文化人類学、日米文化、女性学	副
准教授	池田 利昭	ドイツ中近世都市、ドイツ近世国家、犯罪の社会・文化史	副
	伊藤 滋夫	フランス中世・近世史、財政史研究、公債の研究	副
	小座野 八光	東南アジア近現代史、ジャワ農村経済史	副
	福岡 千珠	社会学、アイルランド研究	副
	藤倉 哲郎	ASEAN経済、東南アジア地域研究	副
	正木 慶介	近代イギリス史	副
	矢野 順子	東南アジア政治、東南アジア地域研究	副
講 師	渡会 環	ブラジル地域研究、人種・エスニシティ	副
	白谷 望	モロッコ政治、中東・北アフリカ地域研究、比較政治学	副

D：博士後期課程 M：博士前期課程 主：主指導担当教員 副：副指導担当教員



## 東 弘子 教授

【あづま ひろこ】

■授業科目	言語学研究
■専門・専攻領域	日本語学、社会言語学
■最終学歴	名古屋大学大学院文学研究科 博士課程後期国語学専攻単位取得満期退学
■学位	博士（文学）



研究内容・教育方針

言語をあるがままに分析しようとする言語学の視点をふまえ、一つのスタンダードを指向する大衆的視点またはそれを操作しようとする権力との関係について考察することを、研究の目的とし

- 現代日本語の統語論と語用論の接点に関する研究（心理述語文、敬語、授受表現等）
- 規範意識等、社会制度の中での言語学

を研究課題として掲げている。

大学院生には、自ら研究課題を発見し、広い視野と汎用性のある問題意識を持つことができるよう、専門的知識だけに留まらない学習スタイルを持つよう指導している。

【業績】

- 2018.3 「日本語教師」になる元技能実習生の現状―インドネシア人技能実習生の帰国後のキャリアから問う技能実習制度（木元茜、藤倉哲郎との共著）『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』第50号 pp.105-129（書評）
- 2017.11 書評「移民政策を持たぬ国の「外国人人材」受け入れの実状と課題：布尾勝一郎著『赴くする外国人看護・介護人材の受け入れ』（ひつじ書房、2017年）」『社会言語学』17号, pp.195-198
- 2016.3 インドネシアにおける日本マンガの現地化にみる「クールジャパン戦略」とのすれ違い―『ドラゴン桜』翻案版 KELAS KHUSUS NAGA の事例から―（浜元聡子との共著）『共生の文化研究』10, pp.111-119
- 2011.3「情報提供」から「情報保障」へ―相互理解をめざす協働作業としてのコミュニケーションに見る可能性―（単著）『社会言語学』別冊1「情報弱者のかかえる諸問題の発見とメディアのユニバーサルデザインのための基礎研究」, pp.201-214
- 2010.5 外来語の「ゆれ」にあるインターネット Web サイト上の日本語（単著）『日本語学最新線』（和泉書院）、pp.529-546

## 石原 寛 教授

【いしはら さとる】

■授業科目	歴史英語学研究
■専門・専攻領域	英語学、古英語、英語文献学
■最終学歴	東京都立大学大学院人文学部国語学専攻博士課程中退
■学位	文学修士



研究内容・教育方針

私は古い時代の英語を教育・研究の対象としています。英語の歴史は、紀元1100年頃までの古英語期、1100年頃から1500年頃までの中英語期、そしてそれ以降の近代英語期に分けられ、私の授業ではそれらのうちのいずれかの時代の文獻を扱うこととなりますが、私が専門に研究しているのは古英語（Old English）です。より詳しく私の個人的関心について言えば、古英語期に、その当時の人々の精神に比類なき影響を及ぼした書物である聖書の言葉が、どのように表現されているのかということに特に興味を持っています。古い時代の英語の文獻を読み解くのは、一方で確かに苦勞の多い営みではありますが、他方で現代英語を学ぶのとは異なる知的醍醐味を与えてくれるのもでもあり、それを多少なりとも共有できたらと思います。

【業績】

- 『詩篇38:2における delinquere in の古英語訳について』『愛知県立大学外国語学部紀要』（言語・文学編）第51号、2019、1-23
- 『ラテン語 fons の訳語としての古英語 ryne について』『愛知県立大学外国語学部紀要』（言語・文学編）第50号、2018、1-20
- 『ラテン語 deservire の訳語としての古英語 pęgnian について』『愛知県立大学外国語学部紀要』（言語・文学編）第49号、2017、1-20

## 大森 裕實 教授

【おおもり ゆうじつ】

■授業科目	歴史英語学研究
■専門・専攻領域	英語学、歴史言語学、応用言語学
■最終学歴	関西外国語大学大学院外国語学研究所英語学専攻 博士後期課程
■学位	文学修士（MA）



研究内容・教育方針

English Linguistics & Philology を専攻分野とし、現存する原資料から言語変化の実態とそのメカニズムを解明することを研究課題としている。その目標を達成するためには、古典語とゲルマン諸語に関する（できればケルト諸語に及ぶ）確固とした言語知識の修得が第一であり、それらを基礎として、言語学的視点と文学的視点とのバランスのとれた言語的洞察力をもった院生の育成が肝要であると考えている。Philology に文献学という訳語が与えられることが多いが、眞の文献学とは訓詁の学という意味ではなく、むしろ言語文化学とでもいうべきもので、当該言語圏の歴史や文化を排除した言語研究のことを意図しない。

本セミナーでは、英語史における外面史的側面と内面史的側面のバランスに配慮した Baugh & Cable, *A History of the English Language* を参考文献として、各種の学術論文の分析的考察から、古英語・中英語・近代英語を経て現在の姿になった英語（ELF）が21世紀にどのような変化の方向性をもつものかを予見できる、鋭い感性と深い洞察力を涵養することに専心する。

【業績】

- 『ことばとコミュニケーションのフォーラム』（共著）（開拓社、2011）
- 『学校文法の語らなかつた英語構文』（共著）（勁草書房、2010）
- 『ザミュエル・ジョンソン百科事典』（共訳）（ゆまに書房、1999）

## 池田 周 教授

【いけだ ちか】

■授業科目	英語教育学研究
■専門・専攻領域	英語教育学、応用言語学
■最終学歴	ウォーリック大学大学院博士課程
■学位	PhD in ELT and Applied Linguistics



研究内容・教育方針

英語教育学を専門にしています。特にEFLリーディングにおける「テキストの概要把握プロセス」や、そのプロセスにおける「テキスト構造の把握」や「情報間の論理関係を表す言語的手段からの利用」の重要性を明らかにし、日本人EFL学習者を対象にした効果的な指導プログラムを構築することを目的としています。最近では、小学校英語教育における文字指導や読みの導入にも関心があり、子どものリテラシー獲得や認知発達段階に関する理論、実践的な指導法などについての研究も行っています。担当する「英語教育学研究」の授業では、言語習得や言語教育に関する諸理論について文献を読み込む力を養成し、より専門的な考察を深めます。さらに、履修生が各々の関心分野の研究を主体的に進めていくために必要な研究手法についても指導を行います。日本の英語教育に対する問題意識をもち、それらを積極的に議論していきたいと考えています。

【業績】

- Teacher beliefs about the introduction of letters and early literacy into Foreign Language Activities: Comparative study of elementary and junior high school teachers, Annual Review of English Language Education in Japan, 25, 17-32, 2014.
- 小学校「外国語活動」への文字および初期読み指導導入に対する教員意識、『愛知県立大学大学院国際文化研究所論集』,第14号, 1-13, 2013.
- EFL 読解における論理関係の把握について：Causal 関係の向きと linguistic markers の影響、中部地区英語教育学会『紀要39』,87-94, 2010.

## 江澤 照美 教授

【えざわ てるみ】

■授業科目	ヨーロッパ言語研究
■専門・専攻領域	スペイン語教育学、スペイン語学
■最終学歴	神戸市外国語大学大学院外国語学研究所 イスパニア語学専攻修了
■学位	文学修士



研究内容・教育方針

スペイン語教育が主要な研究テーマです。現在の主な研究課題は、複言語・複文化主義が外国語としてのスペイン語教育（＝ELE 教育）に与えた影響やその問題点の検証です。自身の経験をふまえた実践的報告をおこなう一方で、ELE 教育の最新の動向に注目し、新しい時代の外国語教育の傾向をふまえた教室運営の可能性について常に考えています。その他に、現代スペイン語のリエーションや言語規範と現実の用法との差異などにも興味を持っています。

大学院の授業ではスペイン語専門文献の外書講読などをおこないます。テーマによっては受講生による口頭報告や意見交換などの活動も実施します。

【業績】

- 『異文化理解のためのスペイン語教育』『ことばを教える・ことばを学ぶ』行路社、2018年
- 『ELE 教育の近年の動向』『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』49号、2017年
- 『ヨーロッパ（共通参照枠とセルバンテス協会のカリキュラムプラン）日本のスペイン語教育への応用―』“HISPANICA”54、日本イバニヤ学会、2010年

## 熊谷 吉治 教授

【くまがい よしはる】

■授業科目	現代英語学研究
■専門・専攻領域	英語学、情報構造と韻律論
■最終学歴	東京学芸大学大学院教育学研究所 修士課程英語教育専攻英語学講座修了
■学位	修士（教育学）、Master of Science in General Linguistics



研究内容・教育方針

研究内容：現代英語の語用論、音韻論。具体的には、①情報構造（新・旧情報の現れ方）と動詞意味論・アスペクトとの関係、②音調単位と文法構造の類似性、③日英語の談話構造比較、④音放 出動詞の音韻・音響的特徴の研究である。現代英語を対象とし言語コミュニケーションの仕組みを扱うので、とっつきやすそうに思われるかもしれないが、その反面、人のしたがない仕事（同じデータを何度も見直すことで、理論家が数行で済ますかもしれない事柄を検証する作業）がたくさんある。加えて理論化そのものが難しい分野でもある。

教育方針：英語そのものに人並み以上の興味があることが必要不可欠である。授業は英語の文献を正確に読むことを旨とする。自分の研究目的に必要なデータを収集し、それを元に綿密な議論の展開が行えるかどうか が最も重要である。

【業績】

- “Light Emission Verbs in English: An Investigation of Sound-Symbolic and Semantic Properties.”『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』第51号、51-70、2019年
- “Linguistic and Symbolic Properties of Sound Emission Verbs: A Case Study of Birds and its Theoretical Implications.”『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』第50号、49-68、2018年
- “Some Problems in Exploring the Traits of Sound-Symbolism: A Case Study of Verbs of Crying.”『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』第49号、21-34、2017年など

## 櫻井 健 教授

【さくらい たけし】

■授業科目	言語学研究
■専門・専攻領域	言語学、北欧語学、言語変化・言語接触
■最終学歴	東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻 博士課程単位取得退学
■学位	文学修士・修士（学術）



研究内容・教育方針

研究内容：近年は言語接触について、その社会的な側面はもとより、言語内的な現象の分析まで視野に入れて考察を重ねている。また文化化現象を中心とした言語変化の観察にも研究上の重点を置いている。両者は無関係ではなく、これについて、言語活動は人間というエージェントが行なっていることや人間の行為の特性が言語に反映されていることなどを踏まえ、統一的な解釈の可能性を探っている。

教育方針：いずれにせよ受講生の自発的参加が重要であり、自分で考えるという態度を求める。そのためにも読解力は重要である。言語接触の分野はドイツの研究者によって開拓された分野であり、またヨーロッパにおける言語接触の研究にはフランス語の文献が必須である。また関連する分野のおいての基本的文献は英語で書かれている。このためまず基礎トレーニングとして文献を読む力をつける必要がある。指導はそれを前提として行なう。

【業績】

- 分化の動機としての制約の文化化（2009）愛知県立大学外国語学部紀要41号
- 言語と系統関係 1（2008）愛知県立大学外国語学部紀要40号
- アイスランド語史における動詞非定形要素位置変化の意味（2006）日本アイスランド学会会報25号

## 月田 尚美 教授

【つきだ なおみ】

■授業科目	言語学研究
■専門・専攻領域	言語学、形態論、台湾原住民諸語
■最終学歴	東京大学大学院人文社会科学部 博士（文学）



研究内容・教育方針

私の専門分野は言語学で、特に興味があるのは、形態論、統語論、言語類型論である。台湾に野外調査に出かけて台湾原住民の言語の記述に取り組んでいる。台湾原住民の言語は、若い世代がその言語を話さなくなっている。つまり、消滅の危機に瀕している。それを再活性化させていきたい、と考える人たちもおり、言語学者としてそれを支援するのも課題の一つである。

指導学生には、自分が興味を持った言語の一つを選んで、現地調査に赴くなどして、言語の記述に挑戦してほしい。それを演習形式の授業で発表し、論文に仕上げてもらふ。調査で得た資料を分析し、言語を記述するのに必要な知識、技量はたくさんあり、授業ではそれもしっかり学んでほしい。その言語あるいは周辺の言語の先行研究を踏まえることももちろん重要である。

【業績】

- 2012. Goal Voice and Conveyance Voice of Seediq. In Nakamura and Kikusawa (eds.) *Objectivization and Subjectivization: A Typology of Voice Systems. Senri Ethnological Studies* 77. Osaka: National Museum of Ethnology. 77-95.
- 2009.「セデック語」,中川裕監修ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣人たち。東京：白水社、10-29.

## 中村 不二夫 教授

【なかむら ふじお】

■授業科目	歴史英語学研究、英語言語研究特講（博士後期課程）
■専門・専攻領域	英語学、英語史、近代英語統語論
■最終学歴	岡山大学大学院文学研究科修士課程
■学位	博士（文学）（広島大学）



研究内容・教育方針

『リダーズ英和辞典 第2版』『同 中辞典』『同 大辞典』（未刊）（各れも研究社）の執筆も行ったが、本業は英語史研究である。1500-1950年に書かれた日記・書簡史料を分析し、英語の文法と語彙の歴史を正すことを研究課題としている。これらの史料は、言語変化の最前線を知る、語法の時代的欠落を補う、消滅したはずの語法が存続しているかどうかを探索する、未発見ないしは報告例がまれない語法を発掘する、ある時代に生きた庶民の語法に対する生の証言を収集する上で貴重だからである。これまで、進行形、完了形、助動詞 do を中心に、著書（単著）1、著書（共著）16、論文30、書評2、国際会議口頭発表20、国内学会シンポジウム司会・講師・個人研究発表18を発表してきた。最近では、ヨーロッパへ発表に出かけるだけでなく、日本学術振興会を通じて著名な研究者を本学に受け入れることにも精力を注いでいる。可能性を秘めた皆さんを、英語学研究の分野で最も長い歴史を有する英語史の、次世代を担う研究者に育て上げることが積年の夢である。

【業績】

- 単著 *Unveiling ‘Rare’ Usages in the History of English.* xxvi + 409. 東京：英宝社、2016.
- 口頭発表 “Affirmative Interrogatives without the Auxiliary Do in Modern English” Colloque Bisannuel sur la Diachronie de l’Anglais-5（第5回英語国際会議）(2017年、於フランス=ラベレー大学、フランス)
- 口頭発表 “Ways of Expressing Cardinal and Ordinal Numerals in the History of English: From *one and twenty / one and twentieth* to *twenty-one / twenty-first*” 48th Poznań Linguistic Meeting（第48回ポズナ二言語学会）(2018年、於ポズナ二大学、ポーランド)

## 高橋 慶治 教授

【たかはし よしはる】

■授業科目	言語学研究
■専門・専攻領域	キナウル語記述研究
■最終学歴	京都大学大学院博士後期課程研究指導認定退学
■学位	京大博士（文学）

研究内容・教育方針

私の専門分野は野外調査による言語記述です。対象とする言語はチベット・ビルマ諸語の一つであるキナウル語であり、この言語はインド北西部のヒマーチャル・プラデシュ州キナウル地区で話されています。言語の記述では、その言語がどのような発音や単語をもち、どのような文法体系をもっているかを明らかにすることを目標とします。私の教育方針は、学生が自分で研究できる力をつけるようにすることです。そのため、学生には自分の考えを発言するように求めます。むしろ、その考えは言語学的な発想に基づく必要があります。思いつきではなく、十分根拠のある発想を得るためには、その背景となる知識が必要です。したがって、学生には関連図書をなるべくたくさん読んでいただきたいと思います。

【業績】

- “On the deictic patterns in Kinnauri (Pangi dialect)” In R. Bielmeier and F. Haller eds., *Linguistics of the Himalayas and Beyond*, Berlin: Mouton de Gruyter, pp.341-54、2007/11.
- “A descriptive and morphosyntactic study on Kinnauri (2). 2004-2007年度文科省科研費報告書（代表者 高橋慶治）、2008年3月。
- 「キナウル語の名詞句構造と修飾構造」池田巧（編）『シナ=チベット系諸言語の文法現象 1：名詞句の構造』京都：京都大学人文科学研究所、pp.155-70、2016/3

## 長沼 圭一 教授

【ながぬま けいいち】

■授業科目	ヨーロッパ言語研究
■専門・専攻領域	フランス語学
■最終学歴	筑波大学大学院文芸・言語研究科博士課程
■学位	博士（言語学）



研究内容・教育方針

現代フランス語における冠詞の機能について研究しています。冠詞の一見特殊なように思われる用法のメカニズムや冠詞の有無による解釈の違いなどについて考察を行っています。

大学院の授業では、専門である冠詞等による名詞限定の問題を中心に扱う予定ですが、受講者の研究テーマや興味対象を考慮し、さまざまな言語現象について柔軟に取り上げていきたいと思っています。できるだけ活発に意見交換ができるよう、アットホームな雰囲気の授業を目指します。

【業績】

- 『フランス語における有標の名詞限定の文法』早美出版社[2004年]
- 『プログレッシブ仏和辞典』（第2版）小学館（執筆協力）[2008年]
- 『トライ！フランス語』駿河台出版社（共著）[2009年]
- 『グラメール・ナボ』朝日出版社（共著）[2014年]

## 人見 明宏 教授

【ひとみ あきひろ】

■授業科目	ヨーロッパ言語研究
■専門・専攻領域	ドイツ語学・文法、テキスト言語学、統語論
■最終学歴	早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程ドイツ文学専攻単位取得満期退学
■学位	文学修士（早稲田大学）



研究内容・教育方針

伝達価値と言語表現、テキストの構造、文の統語構造を研究テーマとしています。テーマ・テーマ、新旧情報、焦点などの伝達価値に関わる要素が、どのような形で言語表現（文の統語構造、テキストの構造）に影響を与え、反映されるのかを考察しています。具体的には、代名詞、冠詞、語順、相関詞などが研究対象となります。さらに、これらの要因がテキストにどのような形となって現れるのかも、研究課題です。また、前置詞格目的語を支配する形容詞と相関詞、述語形容詞が用いられた文などの統語構造も研究対象としています。授業では、主にドイツ語のさまざまな文の構造を依存関係文法の観点から、また語順を統語論とテキスト言語学の観点から考察していきます。

【業績】

- 「形容詞と前置詞格目的語の語順について―文学作品における実例の分析を基に(2)―」『国際文化研究所論集』18号、2017
- 「形容詞と前置詞格目的語の語順について―独独辞書用の例の分析を基に(1)―」『外国語学部紀要』第50号、2018
- 「形容詞と前置詞格目的語の語順について―独独辞書用の例の分析を基に(2)―」『外国語学部紀要』第51号、2019

## 広瀬 恵子 教授 〔ひろせ けいこ〕

■授業科目 英語教育学研究、英語言語研究特講（博士後期課程）  
■専門・専攻領域 英語教育学、第二言語ライティング研究  
■最終学歴 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了  
■学位 博士（教育学）



研究内容・教育方針

英語教育学の中でも、特に英語のライティングに関わる基礎研究や実証研究を行っています。今まで、第二言語（L2）で書くプロセスは第一言語（L1）で書くプロセスとどう異なるのか、例えば、日本人の英語学習者が書く英文に特有の文章構造があるのか、日本人英語学習者が英文を書けない原因は何なのか、学習者のL2の英語ライティング力は英語力やL1の日本語ライティング力とどのような関係があるのか、どのような英語ライティング指導が効果的か、などの研究課題に取り組んできました。最近は、特にライティング能力の中長期的な発達指標について研究しています。授業では、少人数クラスの長所を最大限に活かし、受講生の問題意識やニーズに対応したきめ細かな指導を行っています。英文テキストや論文を読み、その内容理解を基に、discussion方式の授業を行いますので、当然ながら英語力（academic skills）が必要です。

### 業績

- Product and process in the L1 and L2 writing of Japanese students of English*, Hiroshima: Keisuisha 2005年
- “Comparing written-only and written-plus-spoken peer feedback in a Japanese EFL university context.” *Asian Journal of English Language Teaching*, 22, 1-23. 2012年
- “Exploring Japanese EFL students’ short-term writing development” *JACET Journal*, 62, 69-88. 2018年

## 森田 久司 教授 〔もりた ひさし〕

■授業科目 現代英語学研究、英語言語研究特講（博士後期課程）  
■専門・専攻領域 英語学、言語学、統語論、意味論  
■最終学歴 オックスフォード大学大学院一般言語学学科博士課程  
■学位 D.Phil



研究内容・教育方針

研究内容：英語と日本語をはじめ、自然言語の統語構造と意味構造に興味があります。統語構造というとは何か？文法と同じもの？と考える人もいますが、20世紀に入り、我々の話す文というのは、さまざまな移動を経て、最終段階が発音となって現れているものということがわかり、その結果、自然言語に対する理解が深まりました。私の研究は、その中でも WH 移動というものに中心を置いてきましたが、最近では both A and B, either A or B のような Coordination の構造や「(し)たい」、「(し)たがる」、「自分」などの文脈に依存する指示語にも興味があります。教育内容：英語又は日本語で書かれた本や論文を読み、英語をはじめ様々な言語の特徴的な現象を観察・理解したうえで、論文の主張をまとめて、発表してもらいます。さらには、問題点を指摘し、最終的に自分なりの主張を持てるようになることを目標とします。

### 業績

- 「日本人が使えない英語の重要フレーズ125」、共著、2009、研究社
- 「日本人の知らない英語必須フレーズ150」、共著、2006、研究社
- A Promotion Analysis of Japanese Relative Clauses, *English Linguistics*, vol.23: 1, 113-136, 2006.

## 岸本 聖子 准教授 〔きしもと せいこ〕

■授業科目 ヨーロッパ言語研究  
■専門・専攻領域 フランス語学、認知意味論  
■最終学歴 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了  
■学位 博士（言語文化学）



研究内容・教育方針

現代フランス語のモダリティ表現について研究しています。主に、いくつかのモダリティ表現が事実性を表すことに着目し、そのメカニズムと談話での意味効果を、人間の事象認知の観点を取り入れながら、意味論的また語用論的に探っています。また、日本語などと比較対照しながらモダリティ表現の意味効果のしくみと言語間の相違をあぶり出すことと、意味論と語用論の接点の問題を追求することも課題としています。

授業では、日本語やフランス語（場合によっては英語）で書かれた論文を読み、基礎的な理論的枠組みの理解をすすめつつ、その論文の主張をまとめてもらいます。さまざまな言語現象における課題を確認しつつ、自分の主張へと繋げられるようにすることが目標です。

### 業績

- 〔単著〕「モダリティ表現にまつわる事実性の意味論」弘学社、2018年。
- 〔共著〕「行為促進型表現におけるボライトネス・ストラテジーの中日仏語対照研究—公共掲示物における社会規範の表示方針を中心に—」『社会言語科学会第41回大会発表論文集』, pp.170-173, 2018年。
- 〔単著〕「法助動詞 *devoir* と *pouvoir* の陳述に関わる意味効果：語用論的観点からの分析」、『フランス語学研究』第49号, pp.43-64, 2015年。
- 〔共著〕« Maximiser la motivation des étudiants par un choix adéquat des examens », *Revue japonaise de didactique du français*, Vol.10, pp.45-61, 2015年。

## 宮谷 敦美 教授 〔みやたに あつみ〕

■授業科目 日本語教育学研究  
■専門・専攻領域 日本語教育学  
■最終学歴 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程、神戸大学大学院経営学研究科博士前期課程  
■学位 修士（言語・文化学、大阪外国語大学）、修士（経営学、神戸大学）



研究内容・教育方針

現在、研究テーマとして「『外国にルーツを持つ生活者（以下、外国人生活者）』のコミュニケーションの現状を明らかにすることと、彼らの日本語学習支援に必要な教材開発」に取り組んでいます。外国人生活者の日本語学習支援を考えるためには「いかに日本語を効率よく教えるか」だけではなく、日本語母語話者も含めた人々が「背景文化や母語の異なる人々とのようにコミュニケーションをとれば意思疎通ができるのか」を考え、実践していく場が必要だと考えています。日本語学習支援や教材開発に関する研究をするには、日本語支援の実践を通して、自身の活動を内省することが不可欠です。「日本語教育学研究」を履修する人も、単に授業で学ぶだけではなく、具体的な活動を通して理解を深めてほしいと願っています。

### 業績

- “Project-Based Learning for Global Communicative Competence” JALT Postconference Publication JALT2016, 297-306, 全学語学教育学会（共著）
- 「日本語教育と日本語教育実習の融合を目指した相互交流プログラム—インドネシア・ガジャマダ大学における教育実践を基に—」 *CAJLE2014 Proceedings*, pp.66-73, カナダ日本語教育振興会
- 「聞いて覚える話し方 日本語生中継シリーズ」（共著）くろしお出版

## 糸魚川 美樹 准教授 〔いとがわ みき〕

■授業科目 ヨーロッパ言語研究  
■専門・専攻領域 スペイン語圏社会言語学、スペイン語教育  
■最終学歴 名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程（後期課程）満了  
■学位 修士（学術）



研究内容・教育方針

スペイン語を社会言語学的観点からとらえることを目的とし、とくにジェンダー概念を用いて考察している。また最近では、南米出身者の増加に伴う日本社会におけるスペイン語使用・スペイン語教育について、フィールドワークや実践を通した考察を試みている。授業では、スペイン語圏の言語問題を扱う。日本語による社会言語学に関する文献を参考にしながら、スペイン語で出版されている社会言語学概論・各論の文献をテーマごとに読み進める。各回の担当者が、関連する文献を参考にしながら指定文献をまとめてレジュメを用意し、それをもとに議論するという形式です。学期の終了時には、先行研究と独自のデータ・分析結果をまとめて提出する。

### 業績

- （分担執筆）「法律における「性」の記述」堀田英夫編著『法生活空間におけるスペイン語の用法研究』ひつじ書房, pp.177-200, 2016
- （分担執筆）「文化の仲介者たち—スペインにおける公共サービスの実践と課題」竹中克行編著『グローバル化と文化の境界』昭和堂, pp.82-98, 2015年
- （分担執筆）「愛知におけるラテンの言語と文化」愛知県立大学歴史文化の会編『大学の愛知ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂, pp.239-253, 2014年

## 袖川 裕美 准教授 〔そでかわ ひろみ〕

■授業科目 通訳演習・通訳研究  
■専門・専攻領域 日英同時通訳・通訳研究、コミュニケーション論  
■最終学歴 フリディッシュ・コロンビア大学（カナダ）  
■学位 修士（文学）



研究内容・教育方針

放送通訳（NHK・BS、BBC ワールドニュース、CNN など）と会議通訳に25年あまり従事してきました。同時通訳だけが“凄い”ように思われがちですが、通訳は「逐次に始まり、逐次に終わる」と言われるように、どちらも奥が深く、常々何が伝わるコミュニケーションかを考えてきました。

授業では、アメリカ大統領の演説などを取り上げ、逐次・同時通訳演習を行います。そのために、シャドウイングなどの基礎訓練を行いながら、平行して、日・英の新聞を基に学生個人の「News of the Week」を作成してもらい、さまざまな分野の基本的知識（日本語と英語）を蓄積していきます。プレゼンテーション力を重視し、何が伝わるか、何を伝えるかをテーマに、授業を互いに刺激しあう学びの場にしたいと思っています。

## 楊 明 准教授 〔よう めい〕

■授業科目 中国語学研究  
■専門・専攻領域 現代中国語文法、日中対照言語学、中国語教育  
■最終学歴 千葉大学社会文化科学研究科博士課程修了  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

研究内容：現代中国語の動詞と構文について、認知言語学のパラダイムで日本語との対照も視野にいたれた研究を行っている。最近では現代中国語とメトニミーの関係について研究している。具体的には、動詞や名詞の多義性とメトニミーとの関係や二重主語構文とメトニミーの関係を中心に研究を展開している。特定の文脈において、メトニミーが語彙や構文の意味拡張にどのような機能を果たすものなのかが主要な研究内容になる。さらに、その機能は、果たして日本語や英語との相違点がないのかという点も研究の対象の一つになる。

教育方針：認知言語学に関する日本語や英語の文献や重要論文を読み、その基本的な理論を把握した上で、中国語の語彙や文法にかかわる現象や問題点について認知意味論的な分析・説明を行う能力を養う。受講生は、関連文献についてパワーポイントを用いたプレゼンテーションにより口頭報告などを実施する。

### 業績

- 「参照点構造におけるプロファイル・シフトによる自然交替」『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』第51号, 139-158, 2019年
- 「中国語の把構文における視点変動と目的語交替：「V-満」を述語とする場合を中心に」『認知言語学研究』2, 57-78, 2017年, 開拓社
- 「非能格自動詞による動補構造に関する構文文法的な考察—パートニミーとトポニミーによる意味拡張」『現代中国語研究』12, 1-8, 2010年, 朋友書店

## 梶原 克教 教授 〔かじはら かつり〕

■授業科目 英語圏文化批評研究  
■専門・専攻領域 英語圏文化、批評・理論  
■最終学歴 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻（広域英語圏言語文化）英語英米文学専門分野博士課程単位取得満期退学  
■学位 文学修士（東京大学）、MA with Distinction（アルスター大学）



研究内容・教育方針

文学や文化は、時代・地域・技術といった諸々の要素の影響を受けて生み出されます。そのような文学・文化を研究するにはさまざまなアプローチがありますが、文化的産物を多方向から捉えるために、諸々の批評的アプローチを習得し、実践するのが本講座の主眼です。そうした研究は、おのずと従来の考え方では見過ごされがち（それゆえ貶められることも多い）、変容を重ねる現代文化の（不）可能性と向き合うことになります。そして最終的には、あらたに到来しつつある文化現象を理解するのに必要な、来るべき理論を構築することを目的とした研究につながります。実際の授業は、まずこれまでに確立されてきた諸々のアプローチ（物語論や精神分析学や新歴史主義批評など）の習得を経て、自分にあったアプローチで作品を分析・発表してもらい、討議をしたいと考えています。対象は、英語圏の文化に属するものであれば、文学、映画、絵画、写真など何でも扱います。

個人の研究では、大国の周縁に位置づけられるアイルランドやカリブの諸国が現代文化に及ぼした影響力に関する研究と、グローバル社会における映画に関する研究を中心におこなっています。

### 業績

- 『「北大西洋の亡霊たち」、松本昇ほか（編）『亡霊のアメリカ文学—豊穡なる空間』(国文社) 所収
- 『フィクションと歴史記述—「オスカー・ワオの短く美しい人生」試論』多民族研究会編『エスニック研究のフロンティア』所収
- 『アダプテーションと映像の内在的論理—「ノーカントリー」における遅延を例に』岩田和ほか（編）『アダプテーションとは何か—文学／映画批評の理論と実践』(世織書房) 所収

## 木全 滋 教授 〔きまた しげる〕

■授業科目 アメリカ文学研究  
■専門・専攻領域 アメリカ文学、ホイットマンと19世紀文学  
■最終学歴 東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程（ゲルマン系言語専攻）修了  
■学位 修士



研究内容・教育方針

私の専門は19世紀アメリカ文学（散文、詩）と20世紀アメリカ詩です。アメリカの代表的な詩人の一人であるホイットマンを中心に、この時代のアメリカの文学と文化を研究しています。ホイットマンは初めて詩集を出版した時36歳になっていましたが、それまでに彼は教員、政治ジャーナリストなど幾つもの職業を経験していました。また、オペラや芝居を観に劇場に通い、当時流行していた改革運動や疑似科学にも興味津々でした。彼が残した詩や散文を読むことは、この興味深い時代をより深く理解することにつながると考えています。授業では、各詩人の言葉の技巧、思想的・文化史的背景両面に注意しつつ、テキストの精確な読解を試みます。19世紀の詩にも20世紀の詩にも、詩人の個性とともに、その時代にしか生まれなかったであろう独特の雰囲気や刻印されています。そうしたものを皆さんが少しでも感じられるようになることを目的したいと思います。

### 業績

- 「ホイットマンの夜への賛歌—「眠る人びと」を読む—」(『ホイットマンと19世紀アメリカ』、開文社、2005)
- 「19世紀アメリカの文学者たちとヨーロッパ」(『MULBERRY』（愛知県立大学外国語学部英米学科）第59号、(2010)
- 「ホイットマンの「復活」と二月革命」(『MULBERRY』（愛知県立大学外国語学部英米学科）第64号、(2015)

## 袁 晓今 講師 〔えん ぎょうきん〕

■授業課題 中国語教育研究  
■専門・専攻領域 中国語学、語構成論、生成語彙論  
■最終学歴 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了  
■学位 博士（言語文化学）



研究内容・教育方針

中国語学。その中でも「語構成論」、「名詞」特に「三音節語」が主な研究分野である。現代の中国語学においては「語」の研究は「文」の研究ほどには盛んではない。「名詞」研究もほかの品詞に比べ、乏しい。また、「三音節語」研究については、中国では「対を良しとし、偶を尊ぶ」という通り、「二音節語」研究ほどには重視されていない。しかし、私はこれらの研究分野は今後大いに深められ、重要性を増していくだろうと確信している。また新たな研究分野として、中国語の言語景観、翻訳論、社会言語学なども射程に入れている。

大学院生には、研究者の卵として、各々の言語現象をミクロ的に掘り下げていくのと同時に、常にマクロ的な視点を忘れないように心掛けてもらいたい。自らが研究している言語現象について、それが言語体系の中でどのような位置付けにあるのか、目を配りつつ、点から線へ、線から面へと研究を継続してほしい。研究能力の養成に力点を置き、授業を進めたい。

### 業績

- 「从“门帘”、“门帘子”、“门帘儿”的语义和结构谈起」、『中国語研究』, 白帝社, 第59号, pp.67-82, 2017年
- 「[2+1]型三音節複合名詞の二音節語基」,『杉村博文教授退休記念中国語学論文集』, 白帝社, pp.236-257, 2017年
- 「現代汉语三音节名詞的词汇化—“XY的人”和“XY人”为例—」,『漢語と漢語教学研究』東方書店, 第5号, pp.25-33, 2014年

## 川尻 文彦 教授 〔かわじり ふみひこ〕

■授業科目 中国文学文化研究  
■専門・専攻領域 中国近代思想  
■最終学歴 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得  
■学位 文学士（東京大学）、文学修士（東京大学）



研究内容・教育方針

清末から民国初にいたる近代中国の思想文化史全般に幅広い関心をもっています。中国の近代思想が専門です。具体的には、中国における西洋思想の受容と伝統思想の変容、清末中国と明治日本の思想連鎖、社会主義思想の伝播、20世紀初頭の在日中国知識人の思想と活動、清末民国初の教育思想、東西比較文明論などに学問的な興味を持っています。時代的には1898年の戊戌変法を前後する時期を扱い、最近では戊戌変法後、日本に亡命・留学した中国知識人（梁啓超など）が、明治日本の学術をどのように理解し、中国の知識界に紹介したのに着目し、東アジア近代における学問や知識の制度がどのように成立したのか、について論文を書きました。授業では、中国の近代思想を研究する際の学問的な方法論についてとくに留意し、みなさんと一緒に考えたいと思います。そのため日中の研究者が書いた日本語、中国語（あるいは英語）の研究論文を読み、討論します。また研究史料としては中国語の史料はもとより、日本語の史料も積極的に活用するように心がけ、中国近代の思想家や思想という研究対象に対して多面的なアプローチを心がけます。

### 業績

- 「自由と功利—梁啓超の功利主義を中心に」村田雄二郎編『リベラリズムの中国』有志舎、2011年、102-125頁
- 「第9章近代化」湯浅邦弘編『概説中国思想史』ミネルヴァ書房、2010年、189-208頁
- 「近代中国における“文明”」鈴木貞美・劉建輝編『東アジア近代における概念と知の再編成』国際日本文化研究センター、2010年、131-160頁

## 工藤 貴正 教授 〔くどう たかまさ〕

■授業科目 中国文学文化研究、中国文学研究特講（博士後期課程）  
■専門・専攻領域 中国近現代文学、日・中・台北比較文化文学  
■最終学歴 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修了  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

研究内容：

- (1) 魯迅を中心とする民国期文学及び民国文壇に関する研究
- (2) 民国期翻訳史に果たした日本知識人の役割に関する研究
- (3) 戦間・戦中期の文学媒体に見る日・中知識人の相互認識に関する研究

教育方針：

- (1) 学問と人間に対して誠実であること
- (2) 知識に対して貪欲であること
- (3) 既定概念に対して問題意識を有すること

### 業績

- 〔単著〕中国語圏における厨川白村現象—その受容の隆盛・衰退・回帰と継続, 思文閣出版、A5判上製340p. 平.21.12 (2009)
- 〔単著〕魯迅と西洋近代文芸思潮, 汲古書院、A5判上製402p. 平.20.9 (2008)
- 〔共著〕中国近代文学概要—「近代」を巡って、「現代中国」への道案内Ⅱ』白帝社、平.20.9 (2009)



## 今野 元 教授

[こんの はじめ]

■授業科目	ヨーロッパ政治研究
■専門・専攻領域	ヨーロッパ(国際政治史、ドイツ政治思想、日独関係史)
■最終学歴	東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了
■学位	Dr. phil. (ベルリン・フンボルト大学)・博士 (法学) (東京大学)



研究内容・教育方針

19世紀ドイツを中心に欧米世界の政治史・政治思想史を研究している。人間における理性と情念との葛藤が関心の対象で、とりわけナショナリズムや宗教的情熱が政治に与える影響について考えてきた。従来は西欧派ドイツ・ナショナリストとしてのマックス・ヴェーバーに焦点を当ててきたが、近年ではフランス革命から現代まで視野を拡げ、ドイツ政治史の多様な側面に取り組んでおり、また近現代日独関係史にも分析を拡げつつある。

大学院教育において重視するのは、語学力及び史料解析能力である。外国研究において、語学力の向上に努めるのは当然のことだろう。加えて重要なのは、収集した史料から多様な情報を引き出す解析作業であり、それは丁度ソムリエがワインの微妙な違いを言い当てるのに似た営みである。大量の研究文献を大雑把に読んで概括するのではなく、一つの史料、いや一つの文章を徹底して読み込み、そこから何かを引き出す地道さ、堅実さを、大学院生には求めたい。

### 業績

- Hajime KONNO, Max Weber und die polnische Frage, Baden-Baden: Nomos 2004.
- 今野元「マックス・ヴェーバー」(東京大学出版会、平成19年)。
- 今野元「多民族国家プロイセンの夢」(名古屋大学出版会、平成21年)。

## 野内 美子 教授

[やない はるこ]

■授業科目	欧米経済研究
■専門・専攻領域	EU、フランス経済
■最終学歴	東北大学大学院経済学研究科博士課程後期単位取得満期中退
■学位	博士 (経済学)



研究内容・教育方針

私の専門はEUの経済政策分析です。EU（欧州連合）は、欧州各国間の対立を克服して「1つのヨーロッパ」をつくらうという欧州統合運動の現時点での到達点です。第二次世界大戦後、度重なる戦争により多大な物的・人的被害をこうむり、また国際社会における地位の低下を経験した欧州諸国は、「平和で豊かな1つのヨーロッパ」の構築をめざして、まず経済統合を進め、さらには政治統合に乗り出します。戦後の欧州統合運動は、かつて敵同士であったフランスと（西）ドイツに加えてベルネクス3国とイタリアの6カ国で始まり、2015年時点でのEU構成国は28カ国で、域内人口は米国の人口を超え、経済力も米国に匹敵する程です。今日の世界経済の中でEU経済の占める比重は非常に高いと言えるでしょう。私の研究・教育においては、従来ドイツと共に欧州統合主導国であったフランスに焦点をあて、フランスの経済政策・欧州政策の展開とEUの発展過程との関連性を明らかにしていくつもりです。

### 業績

- 『EU経済のグローバル化とフランスの変貌―グローバルバージョンに立ち向かうEUとフランス―』『土地制度史學』土地制度史学会、第175号(2002年4月) pp.44-53.
- 『EUにおける経済政策協調―展開と論点』『愛知県立大学外国語学部紀要 地域・国際学編』第38号(2006年3月) pp.53-80.

## Andrea Carlson 准教授

[アンドレア カールソン]

■授業科目	
■専門・専攻領域	コンピュータを利用した語学学習、社会心理学、多文化コミュニティのためのメンタルヘルス支援
■最終学歴	ケント大学 (英国) 言語学研究科 博士課程
■学位	博士 (言語学)



研究内容・教育方針

多様な背景を持つ人々の、特にある意味で社会的に孤立したり周縁化された人々の、メンタルヘルスや情緒的ウェルビーイングについて関心を持っています。日本における多文化な子どもや若者の、メンタルヘルスニーズや支援について調査、研究しています。授業では学生の皆さんに、考えや視点、知識を積極的に共有することにより理解を深めることができる、様々なフォーラム（討論会）を提供していきたいと思っています。

### 業績

- 『Considerations regarding school-based mental health promotion and provision at international schools in Japan (日本における学校ベースでのメンタルヘルス促進と対策に関する考察)』紀要、地域研究・国際学編、愛知県立大学外国語学部編 (51) 221-233、2019
- 『実践報告：多文化に生きる児童のウェルネスを支えるダイバーシティ理解シンポジウム』日本国際理解教育学会 第27回研究大会発表要録、133-134、2017
- 『Considering social, emotional and mental health support for multicultural / international children and teenagers in Japan (日本の多文化な/国際的な子どもやティーンエイジャーに対する社会的、情緒的、メンタルヘルスの支援に関する考察)』紀要、地域研究・国際学編、愛知県立大学外国語学部 編 (49)、163-176、2017

## 中田 晋自 教授

[なかた しんじ]

■授業科目	ヨーロッパ政治研究 <p>フランス政治研究特講 (博士後期課程)</p> <p>政治学 (フランス都市政治研究)</p>
■専門・専攻領域	立命館大学大学院法学研究科公法専攻
■最終学歴	博士課程後期課程満期退学 (1999年)
■学位	博士 (法学)〔立命館大学、2006年9月〕



研究内容・教育方針

中央集権国家の典型とされるフランスが、1980年代に至って地方分権改革（ミッテラン政権下の1982年）を実施した背景について明らかにすべく、その前史たる1970年代の分権論議や歴代政権の地方分権政策について検討すると、フランスの1970年代がまさに「分権・参加・アソシアシオン」の時代であったことがわかる。フランス革命以来の伝統的政治文化を転換させるエネルギーが発揚されたこの時代、都市自治体における分権化要求運動のなかから「地域民主主義 (la democratielocale)」の理念が提起され、この理念はその後、法制度化の過程をたどる。そして現在では、2002年の「近隣民主主義法」により、人口8万人以上の都市コミュニティに「住区評議会」の導入が義務づけられており、50都市におけるこの実践は、「熟議 = 参加デモクラシー」研究の観点から極めて興味深い事例となっている。以上のような問題関心を踏まえ、大学院の授業では、フランスの分権・市民社会論者による研究業績の読了・検討を中心に、フランス政治の新たな動向をフォローしていく。

### 業績

- 単著『フランス地域民主主義の政治論―分権・参加・アソシアシオン―』(御茶の水書房、2005年)
- 単著『市民社会を鍛える政治の模索―フランスの「近隣民主主義」と住区評議会制―』(御茶の水書房、2015年)

## 奥田 泰広 准教授

[おくだ やすひろ]

■授業科目	イギリス政治研究
■専門・専攻領域	イギリス政治・外交、国際関係史
■最終学歴	京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了
■学位	博士 (人間・環境学)



研究内容・教育方針

私はこれまでイギリスの政治・外交システムについて研究してきました。とくに関心を持っているのは、イギリスの首相がどのようにリーダーシップを発揮してきたのか、という点です。また、それとは別の観点になりますが、そうした首相の行政活動が、立法機関である議会からどのような監視（オーバースイト）を受けているのかについても興味を持っています。

研究方法としては歴史的アプローチを用いることが多く、公表された研究成果の多くは、19世紀から20世紀にかけての時代を対象としています。具体的には、20世紀前半のイギリスの外交政策や安全保障政策など、対外政策全般について研究してきました。

大学院の授業では、必ずしも歴史的アプローチにこだわるものではありませんし、また対外政策に限定するものでもありません。近現代のイギリス政治全般について、幅広い観点から取り上げていきたいと考えています。

### 業績

- 『国家戦略とインテリジェンス』(PHP 研究所、2011年)
- 『イギリスにおける情報重視の戦略文化』『国際政治』第167号 (2012年)
- 『ベヴィン外交における中国問題』『情報史研究』第7号 (2015年)

## 高阪 香津美 准教授

[こうさか かづみ]

■授業科目	多文化共生論
■専門・専攻領域	ポルトガル語教育、多文化共生
■最終学歴	大阪大学大学院
■学位	博士 (言語文化学)

研究内容・教育方針

日系人の就労を事実上合法とする1990年の「出入国管理及び難民認定法」の改正を機にブラジル出身者の人口は増加し、法務省在留外国人統計（平成28年12月末現在）によると、その数はおよそ18万人にのぼる。そうした彼らの滞在形態は長期化の傾向を示し、「生活者」としての色合いが濃い。その結果、日本生まれの子どもが増加し、公立学校には日本の子どもに混じり学校生活を送る在日ブラジル人児童・生徒の姿が数多く見受けられるようになっている。こうした中で、継承語・母語の喪失が顕在化しており、これまで彼らに対する継承語・母語教育の在り方を探る研究を続けてきた。その一方で、ブラジル出身者との共生にあたり、外国語としてのポルトガル語の学習機会が必要不可欠であるにも関わらず、現在、その社会的な位置づけは決して高いとはいえない状況にあり、日本における外国語としてのポルトガル語学習・教育環境の在り方を探る研究も行っている。外国人住民を取り巻く状況は刻々と変化しているため、社会の動きを的確に捉えた授業を行っていきたい。

### 業績

- (著書)『口が覚えるブラジルポルトガル語―スピーキング体得トレーニング―』三修社2012年9月
- (著書)『第1部異言語間のインターカルチュラル・コミュニケーション：第5章言語的マイノリティの子どもと母語・母文化に対する態度の変容―異文化間メール交流をきっかけに―』三牧陽子他編『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』くろしお出版2016年3月 pp.67-81
- (報告書)『ゼミ生と共著』国際協力レポート部門佳作『世界地図を作ろう―愛知県立大学と瀬戸市立八幡小学校の世代を超えた交流―』独立行政法人国際協力機構 (UICA)『グローバル教育コンクール2012受賞作品集 (DVD)』2013年

## 杉原 周治 准教授

[すぎはら しゅうじ]

■授業科目	ヨーロッパ政治研究
■専門・専攻領域	ドイツ法、憲法学、メディア法
■最終学歴	広島大学大学院社会科学研究所博士課程後期単位取得退学
■学位	博士 (法学)



研究内容・教育方針

現在の研究活動は、とりわけ、憲法学、放送法、メディア法における日本とドイツの比較研究、ならびにEUメディア法の研究である。

教育方針として、まずはドイツの伝統的な法律学の議論に触れること、さらにそこで学んだドイツ法の議論を、日本で現在生じている様々な法的問題の解決への手がかりとしてどのように応用すべきかを修得すること、が挙げられる。さらに、ドイツの法律学の基礎論に加えて、最新の応用理論の分析を行う能力を修得すること、が重要となる。

### 業績

- 『劇場公開映画におけるプロダクトプレースメント―ドイツ連邦通常裁判所1995年7月6日判決を中心として』鈴木秀美編『憲法の規範力とメディア法』193～223頁(信山社・2015)
- 『ドイツにおける秘密保護法制と報道関係者の憲法上の権利(一)(二・完)』愛知県立大学外国語学部紀要 (地域研究・国際学編) 47号 167～203頁 (2015)、愛知県立大学大学院国際文化研究科論集16号 181～216頁 (2015)
- 『KEKの Axel Springer 決定(一)(二・完)』愛知県立大学外国語学部紀要 (地域研究・国際学編) 46号 121～147頁 (2014)、愛知県立大学大学院国際文化研究科論集15号 103～130頁 (2014)

## 西野 真由 准教授

[にしの まゆ]

■授業科目	東アジア政治経済研究
■専門・専攻領域	現代中国経済、中国のフードシステム研究
■最終学歴	東京農業大学大学院農学研究所農業経済学専攻博士後期課程修了
■学位	博士 (農業経済学)



研究内容・教育方針

私は主に中国における地域間の人口移動について研究を行っています。中国は、改革・開放政策実施以降、飛躍的な経済成長を達成しましたが、その一方で、国内では、解決しなければならない課題が山積しています。例えば、所得格差の拡大や深刻な環境問題、食糧問題、資源確保問題など様々な問題が噴出しています。

近年、拡大する所得格差を背景に、地域間の人口移動は増大を続け、都市・農村社会に様々な影響をもたらしています。本講義では、中国の農業・農村問題、なかでも地域間の人口移動問題を通して中国の構造的な課題について理解を深めていきたいと考えています。

### 業績

- 『外食企業のグローバル化と海外進出戦略』大島一也 他編『日系食品産業における中国内販戦略の転換』筑波書房、2015年、pp154-167.
- 『中国における研修生派遣企業に関する一考察―中国山東省青島市の事例より―』『農村生活研究』第57巻 第1号、日本農村生活学会、2013年9月、pp32-39.
- 『変わりゆく中国農村』工藤貴正・樋泉友夫編『現代中国への道案内Ⅱ』白帝社、2009年、pp.313-340.

## 山下 朋子 准教授

[やました ともこ]

■授業科目	国際法
■専門・専攻領域	国際法
■最終学歴	神戸大学大学院法学研究科博士後期課程修了
■学位	博士 (法学)



研究内容・教育方針

私の専門分野である国際法は、かつては国家間関係のみを規律する法でした。しかし現在では、国際機関、個人、企業など様々な国家「以外」の主体も法の適用対象であるだけでなく、法の形成にまで関与するようになっています。現在の主な研究関心は、国家責任法を中心に慣習法理論として発展してきた国家間法が、現在の現代グローバルな法秩序においてどのように適用・修正され、作用するのかという点にあり、特に国際投資仲裁に着目して研究を進めています。

### 業績

- 『投資条約仲裁における国内的救済完了原則の適用例外―無益性の抗弁―』『国際法外交雑誌』117巻1号 (2018) 158-180頁。
- 『Denizenship as a Basis for Compulsory Diplomatic Protection: Does Residence Security as a Human Right Restrict State Sovereignty?』in Ekaterina Yahyaoui Kurvenko, Human Rights and Power in Times of Globalisation (Brill Nijhoff, 2018) pp.135-169.
- 『国内的救済原則の例外：国連国際法委員会外交的保護条文の検討を中心に』『国際公共政策研究』21巻1号 (2016年) 1-23頁。
- 『Responsibility to Protect as a Basis for "Judicial" Humanitarian Intervention』in Richard Barnes and Vassilis Tzevelekos (eds), Beyond Responsibility to Protect: Generalizing Change in International Law (Intersentia, 2016), pp.367-392.
- 『外交的保護制度の理論と実際』(神戸大学、博士論文、2015年)

## 鈴木 隆 准教授

[すずき たかし]

■授業科目	東アジア政治経済研究
■専門・専攻領域	現代中国政治・中国共産党研究
■最終学歴	慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻
■学位	博士 (法学)



研究内容・教育方針

わたしの主たる研究活動は、①現代の中国共産党政権の政治体制と支配に関する実証研究、②近現代中国の政治体制と民主化、デモクラシー論に関する言説研究、という二本の柱で構成されています。これらは相互補完的な関係にあり、中国の近現代政治史を通底する権威主義的政治体制の成立と発展について、とくに、中国の「政党政治」における支配とデモクラシーをめぐる認識と実践に焦点を当てながら、政治学・歴史学的な分析手法を用いて研究を進めています。大学院の授業では、研究力量の総合的な涵養を念頭に置いた基本史料の読解と分析を行います。具体的には、現代中国の政治と社会を扱った近年における主要な英文業績を精力的に読み進めると共に、近現代中国の政治的コンテクストと歴史の連続性を重視した、中国語史料の通時的かつトータルな内容把握に努めます。これにより、受講生の皆さんには、修士・博士論文のテーマとなるべき大きな問題設定と、そこでの綿密な資料解釈に習熟できることを期待します。

### 業績

- 著書『中国共産党の支配と権力―党と新興の社会経済エリート―』慶應義塾大学出版会、2012年。
- 愛田雅晴、鈴木隆共著『共産党とガバナンス』東京大学出版会、2016年。
- 共編者、猪口孝ほか編『環日本海国際政治経済論』ミネルヴァ書房、2013年。

## 山口 雅生 准教授

[やまぐち まさお]

■授業科目	国際関係論研究
■専門・専攻領域	国際経済学、日本経済
■最終学歴	兵庫県立大学大学院経済学研究科博士後期課程修了
■学位	博士 (経済学)



研究内容・教育方針

資金の貸借を主とする金融経済の活動が、財・サービスの生産・販売が主な実体経済の活動に比べて、大きくなってきています。それに伴い国境を越える資金移動の規模も拡大し、何らかの経済ショックが世界各国の金融市場に波及し、バブルや金融危機が国際的に影響しやすくなっています。私はマクロ経済学的な観点から、国際経済や日本経済を分析しています。特に経済政策や金融政策が経済成長・物価・雇用・金利・為替レートに与える影響や経常収支不均衡と保護貿易について、制度的な側面も考慮に入れて研究しています。

授業では、受講者の問題意識を大切にしながら研究課題を決めて、その研究課題に関連する文献研究を行っています。文献の中の不明な点や展開される議論について検討しながら、研究を行う力を養います。

### 業績

- 『グローバル化経済の構図と矛盾』桜井書店 (共著) 2011年
- 『経済のことが基礎からわかる』日本能率協会マネジメントセンター (単著) 2011年
- 『グローバル化時代の日本経済』桜井書店 (共著) 2014年

## 天野 知恵子 教授

[あまの ちえこ]

■授業科目	ヨーロッパ歴史社会研究
■専門・専攻領域	フランス歴史文化研究特講 (博士後期課程)
■専門・専攻領域	フランス近現代史、フランスの子ども・家族・学校の歴史
■最終学歴	名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位修得退学
■学位	博士 (歴史学)



研究内容・教育方針

研究内容：現在行っている研究の一つ目は、フランス革命から20世紀にかけてのフランス近・現代史において、子ども像がいかなる変遷をたどるかを考察することです。さまざまな社会層で「子ども」はどう認識されたかについて検討しています。二つ目は、同時期のジェンダー史研究です。とりわけ女性のイメージの変化や、家族の中の女性の位置に関して、分析を進めています。

教育方針：授業では最新の歴史学研究の成果をふまえ、高度な知識を身につけることを目的としておもに演習形式の授業を行います。近現代フランス社会の様相を政治文化史的な観点から明らかにするとともに、家族史や心性史の手法を取り入れて「人びとはどのようにその時代を生きたのか」という問題を具体的に検討していきます。受講者自身の研究テーマに関連する分野に関しては、さらに詳細な考察を行う予定です。

### 業績

- (単著)『子どもたちのフランス近現代史』(山川出版社 2013年)
- (単著)『子どもと学校の世紀―18世紀フランスの社会文化史』(岩波書店 2007年)
- (論文)『女性』からみるフランス革命』近藤和彦編『ヨーロッパ史講座』(山川出版社 2015年) 所収

## 奥野 良知 教授 【おくの よしとも】

■授業科目	ヨーロッパ歴史社会研究
■専門・専攻領域	近代カタルーニヤ史・カタルーニヤ地域研究
■最終学歴	早稲田大学大学院商学研究科 博士後期課程単位取得退学 修士（商学）
■学位	



### 研究内容・教育方針

私が研究対象としているのは、スペインとフランスにまたがって存在しているカタルーニヤ地方です。中心都市はバルセロナで、独自の言語（カタルーニヤ語）、独自の歴史と文化を持つ地域です。スペイン側カタルーニヤ（カタルーニヤ自治州）は、スペインで唯一産業革命が生じた地域で、現在に至るもGDPの約20%を占めるスペイン経済の中心地で、近年はスペインからの独立運動が非常に盛んになっています。私の問い、カタルーニヤが中世以来長年に渡って独自の集合的アイデンティティを維持しているのはなぜか？ なぜカタルーニヤでは中世以来商工業が盛んなのか？ なぜカタルーニヤでは中世以来議会主義の伝統と合意の政治文化が根付いているのか？ それらの点は、実は互いに深く結びついているのではないかと いうことにあります。授業では、カタルーニヤを題材としながら地域と国家を歴史的に考察していきます。

### 業績

- 『カタルーニヤを知るための50章』明石書店、2013年11月。（立石博高・奥野良知編）
- 『カタルーニヤにおける独立志向の高まりとその要因』『愛知県立大学外国語学部紀要』第47号、2015年3月。
- 『カタルーニヤの独立へ向けた「プロセス」procés』の現状と経緯』『共生の文化研究』11号、2017年3月。

## 黄 東蘭 教授 【こう とうらん】

■授業科目	東アジア歴史社会研究 東アジア歴史文化研究特講（博士後期課程）
■専門・専攻領域	中国近現代史・近代日中関係史
■最終学歴	東京大学大学院国際社会科学専攻博士課程修了
■学位	博士（学術）



### 研究内容・教育方針

私の専門は中国近代史、近代日中関係史です。近代日中両国における「近代知」の形成、日中両国の自己イメージと他者イメージ、歴史叙述、および歴史意識の問題に関心を持っています。大学院の授業では、日本語・中国語の関連資料の発表・解説・討論を通じて、日本と中国における「近代」の意味と両者の相互関連性、および両国の「現代」への影響といった問題に対する理解を深めることを目標としています。履修者一人ひとりの問題関心に沿って問題意識を明確にさせ、研究テーマの設定、資料の収集・分析の方法を身につけさせ、修士論文、博士論文の指導を行います。

### 業績

- (著書)『近代中国の地方自治と明治日本』、汲古書院、2005年。
- (編著)『再生産的近代知識』、『新史学』 第四巻、中華書局、2010年。
- (論文)「明治期漢文中国史書物の歴史叙述」、「アジア教育史研究」 第25号、2016年3月。

## 谷口 智子 教授 【たにぐち ともこ】

■授業科目	比較地域研究
■専門・専攻領域	宗教学、ラテンアメリカ地域研究
■最終学歴	筑波大学大学院哲学・思想研究科
■学位	博士（文学）



### 研究内容・教育方針

新大陸の先住民文化を対象とした文化人類学的、また宗教学的視点からの異文化理解や、比較地域研究の紹介を行っています。特にアンデス地域の古代文化や植民地時代の先住民・混血大衆社会の研究を専門としています。

受講者はその枠を越えた地域の民族、また現代の新大陸先住民や混血大衆文化などを扱うことも可能です。人類学、宗教学、歴史学などの理論に親しみながら、受講生のテーマに沿った人文・社会科学としての論文作成を最終目的とします。資料収集や、必要がある場合はフィールド調査、分析方法、結果の解釈の為の実践的知識や技術を、個々人の研究を進める過程で学び、定期的に論文の講読とディスカッション、またレポート作成の技術指導や、研究発表を行います。

### 業績

- 谷口智子『新世界の悪魔―カトリック・ミッションとアンデス先住民宗教―』、大学教育出版、2007年
- 朴哲著、谷口智子訳『グレゴリオ・デ・セバデース―スペイン人宣教師がみた祿・慶長の役―』、春風社、2013年

## 亀井 伸孝 教授 【かめいのぶたか】

■授業科目	国際文化論、文化人類学研究、人類学研究特講
■専門・専攻領域	文化人類学、アフリカ地域研究
■最終学歴	京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了
■学位	博士（理学）



### 研究内容・教育方針

研究内容：専門は、文化人類学、アフリカ地域研究。おもにカメルーンやコートジボワールなど、西・中部アフリカの9カ国で、フィールドワークに基づいた文化人類学的調査を行ってきました。熱帯雨林の狩猟採集民、子どもたち、手話を話そうろろ者など、周辺化されがちなマイノリティを訪ね、参与観察によってその社会と文化の実態を明らかにするとともに、教育や国際開発のための提言につなげていくことに関心があります。最近では、おもにフランス語圏アフリカにおける言語と人びとの動態に着目する言語人類学的な研究に取り組んでいます。

教育方針：座学よりも、実際に現地に行って見てこよう、人と会って話を聞いてこようという、実証的な研究姿勢を重視しています。もちろん、論文は旅行記とは違うので、自分の経験を適当に文章につづっても学問にはなりません。記録方法やまとめ方のあるていど身に付けてから、後は思いきりよくフィールドに飛び込んでいくというスタイルを育んでもらうことを期待しています。

### 業績

- 単著『森の小さな（ハンター）たち：狩猟採集民の子どもの民族誌』京都大学学術出版会、2010
- 単著『アフリカのろう者と手話の歴史：A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』明石書店、2006
- 編著『子どもたちの生きるアフリカ：伝統と開発がせめぎあう大地で』清水貞夫と共編、昭和堂、2017

## 竹中 克行 教授 【たけなか かつゆき】

■授業科目	欧米地域研究、地理学研究特講（博士後期課程）
■専門・専攻領域	地理学、地中海都市・ランドスケープ研究
■最終学歴	東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学
■学位	博士（学術、東京大学）



### 研究内容・教育方針

グローバル化が進むなかで、生物多様性や文化多様性に関する議論が高まりをみせていますが、私は、そこに地域多様性を加えるべきだと考えています。地域多様性を育てるには、固有名詞で意味づけされた場所や地域の価値を究明する学問、換言すれば、身体と場所、あるいは場所がおりなす地域を結ぶ風景について考究する学問が必要です。これが地理学の生業にほかなりません。私は、地中海ヨーロッパをフィールドとして、人の移動と定着やアーバン commonsの構築に関する研究に取り組んできました。その蓄積をいかして、最近では、都市コミュニケーション研究所を立ち上げて、地理学の視点・方法を基礎としつつ、都市計画や建築などの計画論への橋渡しをめざす、より実践的な研究に挑戦しています。大学院教育では、生の都市・地域に展開する諸事象の関係性を読み解くことに関心をもつ人を広く対象とし、地域多様性のフィールド学研究グループを主な活動の場として、観察・分析・解釈の眼を養っていききたいと思います。

### 業績

- 『多言語国家スペインの社会動態を読み解く』ミネルヴァ書房、2009年（単著）
- 『スペインワイン産業の地域資源論』ナカニシヤ出版、2010年（共著）
- 『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房、2015年（編著書）
- 『空間コードから共創する中川運河』鹿島出版会、2016年（編著書）

## 半谷 史郎 教授 【はんや しろう】

■授業科目	ヨーロッパ歴史社会研究
■専門・専攻領域	ロシア研究（特に20世紀のソ連史）
■最終学歴	東京大学大学院 総合文化研究科地域文化研究専攻 博士課程修了
■学位	博士（学術）



### 研究内容・教育方針

ソ連時代の民族政策が専門です。スターリン時代に強制移住の憂き目を見た少数民族（ドイツ人、朝鮮人など）について、権力による弾圧と統合の両面から研究してきました。近年は、この研究で身につけた歴史研究の方法を用いて、ソ連の文化政策や日ソ文化交流史にも取り組んでいます。

大学院での教育では史料や文献を愚直に読み込む姿勢を、身をもって教えたいと思います。たとえ専門分野が違っても、学問を究める真摯な姿勢を分かち持ちたいです。

### 業績

- ユルチャク『最後のソ連世代』（みすず書房、2017年10月；翻訳）
- ウルフ『ハルビン駅へ』（講談社、2014年10月；翻訳）
- マーチン『アフアマティヴ・アクションの帝国』（明石書店、2011年5月；監訳）
- 『国交回復前後の日ソ文化交流』『思想』2006年7月号

## 久田 由佳子 教授 【ひさだ ゆかこ】

■授業科目	英米歴史社会研究
■専門・専攻領域	アメリカ近代史、建国初期～南北戦争前の社会史・家族史・女性史
■最終学歴	名古屋大学大学院文学研究科 博士後期課程（西洋史学） 満期退学 修士（教育）
■学位	



### 研究内容・教育方針

独立革命と南北戦争にはさまれた、建国初期からアンテベラム期（南北戦争前の時代）の歴史、中でも産業革命を経験した北東部の社会、特に家族や女性のおかれた状況や奴隷制廃止運動について研究しています。この時代に起こった変化は、経済的にも政治的にも社会的にも、その後の時代に大きな影響を与えており、この時代の研究は重要なはずなのですが、日本ではあまり注目されていない分野だといえます。

みなさんとは、アメリカで出版された最新の研究書を読みながら、アメリカ史研究の面白さと研究の難しさを共有していきたいと思っています。

### 業績

- 常松洋・松本悠子編『消費とアメリカ社会―消費大国の社会史』（山川出版社、2005年）(共著)
- 有賀夏紀・小椋山利イ編『アメリカ・ジェンダー史研究入門』（青木書店、2010年）(共著)
- 遠藤森生編『近代アメリカの公共圏と市民』（東京大学出版会、2017年）(共著)

## 秋田 貴美子 准教授 【あきた きみこ】

■授業科目	文化人類学研究
■専門・専攻領域	文化人類学、日米文化、女性学
■最終学歴	オハイオ大学大学院コミュニケーション学研究科 博士後期課程修了
■学位	博士（コミュニケーション学）



### 研究内容・教育方針

日米文化、多文化を人類学、女性学の領域から研究をしています。言葉違い、仕草、ふるまいの他、メディアメッセージやポップカルチャーの背後に隠れているエスニック・人種・ジェンダー・セクシャリティーに関する偏見、差別に焦点をあて、人と文化、人と社会の関係を研究しています。人が生まれ育ち成長していく時、どのように文化が影響するのか。人の生き方や決断にどういう影響を与えるのかに大変関心があります。みなさんといっしょに、人と文化の関係、文化の影響、そして常に変化し形を変えていく文化形成について考えていきたいと思います。

### 業績

- 単著『Japanese women’s suicide and depression under the panopticon』『Communicating Women’s Health: Social and Cultural Norms that Influence Health Decisions』Routledge, 2016
- 共著『Mixing man and monkey in Planet of the Apes』『Tim Burton: Essays on the films』McFarland & Co., 2016
- 共著『My little girl: Questionable coverage』『Contemporary media ethics』Marquette Books, 2014
- 単著『Queer male TV commentators』『Queer media images』Lexington Books, 2013
- 共著『A “vexing implication”: Siamese cats』『Diversity in Disney films』McFarland & Co., 2013

## 伊藤 滋夫 准教授 【いとう しげお】

■授業科目	ヨーロッパ歴史社会研究
■専門・専攻領域	フランス中世・近世史、財政史研究、公債の研究
■最終学歴	東京大学大学院 人文社会科学系研究科 博士課程単位取得満期退学
■学位	博士（文学）



### 研究内容・教育方針

研究テーマは、近世フランスにおける公債制度と金利生活者の形成、フィナンシエ（財務官僚・金融業者）の人脈関係である。近年の研究は、フランス絶対王政の中央集権化が不完全であり、ローカルなさまざまな「集団」が王権による地元の統治に協力していたことを明らかにした。「集団」のひとつである南仏ラングドック地方の三部会をケーススタディとして、三部会による公債発行、公債に投資し金利を受領した金利生活者の社会階層と地理的分布を分析している。

教育においては、フランス中世・近世史に関するフランス語論文・文献の講読を通して、フランス語読解能力を向上させる。歴史学に関する専門用語、とくに近世における司法・財政・行政制度や官職の名称をフランス語から日本語に正しく訳すことを重点に置く。

### 業績

- 「一八世紀ラングドックにおける地方三部会と金利生活者」『西洋史学』第227号、2007年
- 「近世ラングドックにおける身分制議会とフィナンシエ」『異大紀要（地域・国際）』37、2005
- 「一八世紀フランスの公共事業と地方財政」『西洋史学』第201号、2001年

## Edgar W. Pope 教授 【エドガー・W・ポープ】

■授業科目	文化人類学研究
■専門・専攻領域	民族音楽学、日本とアメリカのポピュラー音楽史
■最終学歴	ワシントン大学大学院音楽学科学民族音楽学 博士課程 修了
■学位	博士（Ph.D.）



### 研究内容・教育方針

音楽におけるエキゾチズム（異国情緒・異文化情緒）に焦点を当て、主に日本とアメリカの戦前・戦時中のポピュラー音楽を研究しています。歴史的・政治的・文化的な文脈のなかで音楽要素と歌詞を分析し、そのなかにもられる外来音楽の影響、エキゾチズムとイデオロギーとの相互関係、「異国」のイメージ形成とその変遷を調べています。特に日本とアメリカの初期ジャズと中東に対するエキゾチズム、そして1930年代の日本に現れた「大陸メロディ」というジャンルを研究しています。授業では民族音楽学とポピュラー音楽研究の理論的文献を読み、それについてディスカッションをします。

### 業績

- 『日本のポピュラー音楽にあらわれる「中国」―明清楽の変遷を手がかりとして』『ポピュラー音楽から問う 日本文化再考』（せりか書房 2014年）
- 『Imported Others: American influences and exoticism in Japanese interwar popular music.』*Inter-Asia Cultural Studies* Vol.13 No.4 (2012)
- 『エキゾチズムと日本ポピュラー音楽のダイナミズム』『ポピュラー音楽とアカデミズム』（音楽之友社 2005年）

## 池田 利昭 准教授 【いけだ としあき】

■授業科目	ヨーロッパ歴史社会研究
■専門・専攻領域	ドイツ中近世都市、ドイツ近世国家、犯罪の社会・文化史
■最終学歴	北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程西洋学専攻修了
■学位	博士（文学）



### 研究内容・教育方針

中世後期・近世ドイツの都市と国家を対象に、犯罪と刑罰という視点から、1つは、当時の人々の日常生活を再構成し、他の1つは、警察・行政、刑事裁判における法規範の意図・機能・現実的通用を研究してきました。

また宗教改革以降のドイツにおいて、諸宗派（カトリック、ルター派、カルヴァン派）が近代の社会と国家の形成に及ぼした影響を研究しています。

大学院での教育に当たっては、ドイツ語文献を正確に読解し、その論理構成を把握する訓練を行います。また近代歴史学が今日まで発展させてきた歴史学上の方法論を学び、それを自身の研究にどのように生かすか検討します。

### 業績

- 『中世後期ドイツの犯罪と刑罰』 単著、北海道学出版会、2010年
- 『中世後期・近世ドイツの犯罪史研究と『公的刑法の成立』』『史学雑誌』114編9号、2005年
- 『18世紀後半ドイツ・リッペ伯領のポツァイとコミュニケーション』『歴史学研究』836号、2008年

## 小座野 八光 准教授 【こざの やこう】

■授業科目	東アジア歴史社会研究
■専門・専攻領域	東南アジア近現代史、ジャワ農村経済史
■最終学歴	東京外国語大学地域文化研究科 博士後期課程単位取得中退 修士（国際学）
■学位	



### 研究内容・教育方針

研究内容：第二次大戦前後の時期の東南アジア、特にジャワ島の農業の状況について、経済史的なアプローチより研究している。具体的な手法としてはインドネシアおよび旧宗主国オランダのアーカイブにおける文献調査とジャワ村落部におけるフィールド調査をクロスチェックさせるという手法を採っている。

教育方針：アジア諸国における特殊地域的な情報を経済史・国際関係論などの方法論を介して、より一般化して理解してもらうことを基本的な指導方針としている。具体的には第二次世界大戦を経た後にヨーロッパ諸国の植民地を原型として成立した「国民国家」像の検証を、19世紀以降の旧宗主国による植民地統治のあり方と、当時の国際関係に留意しつつ考察していくこととする。

### 業績

- 『東南アジア史のなかの日本占領』（倉沢愛子編）早稲田学出版部、1997年（第1章執筆）
- 『世界戦争犯罪事典』（文芸春秋編）文芸春秋、2003年（「ブリタル事件」他の項目執筆）
- 『インドネシア・プロテスタント小史』（伊東定典著）ふくろう出版、2006年（編集、解題執筆）



## 福沢 将樹 教授 【ふくざわ まさき】

■授業科目 日本語文法研究  
■専門・専攻領域 国語学、日本語テンス・アスペクト、語用論  
■最終学歴 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

研究内容は、テンス・アスペクトの意味論的・語用論的研究である。具体的には現代日本語と古代日本語を取り上げ、個々の形態の意味記述にとらわれず、一般言語学的にどのような記述の枠組みを設定したらより明確に掘めるかを常に考えている。そのためには狭い意味での言語研究にとどめず、文学理論、社会学、心理学等も視野に入れなければならないと感じており、一部は手をつけたところである。

大学院において、院生はまずは自分の専門領域をしっかりと固める必要があると思っている。しかし自分が教える立場になって痛感することは、専門外の領域についての体験や耳学問もまた、広く持っておいて損はないということである。どんな学問分野にも独特の深い知識・方法論というものはあろうが、その一方でどんな学問にも通底する基本的な発想・態度というものもあろう。それを伝えることができたらと思う。

### 業績

- 『ナラトロジーの言語学：表現主体の多層性』ひつじ書房、2015
- 『タリ・トと動詞のアスペクチュアリティ―『国語学』191、1997
- 『あらずし過去と別人格―『法華百箇聞書抄』のキ・ケリ―』『日文学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院、2005

## 伊藤 伸江 教授 【いとう のぶえ】

■授業科目 日本中世文学研究（韻文・思想）  
■専門・専攻領域 日本中世文学、和歌、連歌、紀行文文学、日記・随筆  
■最終学歴 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻第一種博士課程修了  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

中世文学における創作手法の解明、表現分析、とりわけ十四、五世紀の和歌・連歌、随筆等の表現内容の探究をすすめている。南北朝から応仁の乱に至る約百五十年間の和歌文学は、解明されるべき興味深い問題を多く残している。徒然草の表現と思想、南朝和歌表現の生成過程、耕雲から正徹への和歌の流れ、心敬の連歌理論の構築の様相、宗祇や心敬の万葉語摂取の形などから、中世文学史の根底を流れる本質的な問題を探りあて、和歌文学史をつないでいくことが私の大きな目標の一つである。それゆえ、大学院の授業を通して、こうした大きな問題に目を向け、アプローチし、共に学んでいく。

大学院では、研究者として自立しうるかどうかは当人の努力と覚悟にかかる。学生には、研究者に必須である、頻繁な研究発表の場で戦い論争をはる積極性と、勉学にのみりこむ執拗さとの二つを求める。教員は、学生に研究者に最も必要な和歌文学等の知識の獲得をさせ、学生自らの専門分野の開拓に関して、学生を鍛え、指導する。

### 業績

- 『中世和歌連歌の研究』（単著）笠間書院・H14
- 『草根集 権大僧都心敬集 再編』（共著）明治書院・H17
- 『中世日記紀行文文学集成第七巻』（共著）風間書房・H16
- 『心敬連歌 訳注と研究』（共著）笠間書院・H27

## 宮崎 真素美 教授 【みやざき ますみ】

■授業科目 日本近現代文学研究特講、日本文化特別研究、日本近現代文学研究 他  
■専門・専攻領域 日本近現代文学、近現代詩  
■最終学歴 筑波大学大学院博士課程文芸言語研究科日本文学専攻  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

研究内容：日本近現代文学、特に近現代詩を研究対象としています。「『荒地』派を中心とした第二次大戦前後における文学状況の探究」、「日本文学における近代詩成立過程の探究」、「近現代詩研究から日本近代文学を捉える広範な視野の獲得」をテーマとしています。第二次大戦後の詩状況に研究の端を発し、現在は文明開化期の新体詩、1920年代のモダニズム詩など、それらを通史的に捉えるべく論を重ねています。

教育方針：積極的な研究姿勢の涵養を目指します。学会での口頭発表、審査雑誌への論文投稿など、自らの研究を発信してゆく意識の喚起を求めます。それを裏打ちするのは、研究対象への愛情とたしかな「読み」、そして自身のオリジナリティを相対化する先行研究や、学界の研究動向に対するこまやかな調査と批評といった地道な研究姿勢でしょう。日頃の講義におけるディスカッションと立論に重点を置き、温感に支えられた研究のあり方をともに探ってゆきたいと思います。

### 業績

- 『戦争のなかの詩人たち―『荒地』のまなざし』（単著）(2012. 9 学術出版会)
- 『鮎川信夫研究―精神の架橋』（単著）(2002. 7 日本図書センター)
- 『言葉の文明開化―継承と変容―』（共著）(2007. 5 学術出版会)

## 久保 蘭 愛 准教授 【くぼの あい】

■授業科目 日本語音韻・表記研究  
■専門・専攻領域 国語学、国語史、方言史  
■最終学歴 九州大学大学院人文科学府博士後期課程単位取得退学（2013年）  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

研究内容：近世期から現代に至るまでの方言の歴史を主たる研究対象としている。国語史研究は、資料が豊富に残された中央語を対象にしていることが多い。しかし、ことばの歴史は中央語にのみ存するのではない。我々の日常のことばである方言にもそれぞれの歴史があり、現代につながっているのである。そういった問題意識の下に、僅かながら残された方言文献を用いて研究を行っている。現在、その第一歩として18世紀前半の鹿児島方言を反映するロシア資料を扱っている。また、同時に、現在危機的な状態にある伝統方言の調査・記述も行っている。

教育方針：あらゆる可能性を考慮し、現象を慎重に吟味する姿勢と、論理的な思考力を養うべく、講義等を通してディスカッションを重ねる。また、学会発表及び学会誌に投稿することを目標としてアドバイス・指導を行う。

### 業績

- 『ロシア資料にみる18世紀前半鹿児島方言の「テアル」「テオル」』『日本語の研究』8-1、2012
- 『鹿児島方言の「動詞連用形+オル」』『語文研究』114、2012
- 『鹿児島方言における過去否定形成の歴史』『日本語の研究』12-4、2016

## 中根 千絵 教授 【なかね ちえ】

■授業科目 日本中世文学研究（散文・伝承）  
■専門・専攻領域 日本中世文学、説話文学、今昔物語集  
■最終学歴 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程国文学専攻 修了  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

研究内容は、日本中世説話の研究である。現在の研究課題は、(1)『今昔物語集』諸本の成立の様相 (2)医学説話の注釈 (3)戦の物語の研究である。(1)学会では、現在、様々な周辺の新資料が紹介されている。その中で、『今昔物語集』諸本の様相を掘り起こす試みは、近世における『今昔物語集』の受容の在り方を解明する意味で新しい研究の方向を目指すものである。(2)学会では、かつて医学説話が採り上げられたことはなかった。新しい分野を切り開いているが故に、説話の読解、依拠した書物の探索、諸本の研究は、今後の研究発展の上で、最低限、必要な作業を行う。(3)戦の語りの国際的視野からの研究は、学会に新たな見方をもたらすものであるので、広い視野から従来の研究成果を見渡しつつ、俯瞰的な研究を行う。

教育方針としては、専門分野をさらに探究する研究、新たな発想による研究や先端的課題への取組を推進する。研究成果については、学会で発表するとともに、学術論文として公開するなど、広く社会へ情報発信するよう、指導する。

### 業績

- 2000年1月31日『今昔物語集の表現と背景』全369p. (三弥井書店)
- 2006年2月14日『医談抄』中根千絵、辻本裕成、小野裕子、美濃部重克による共同執筆 全368p. (三弥井書店)

## 洲脇 武志 准教授 【すわき たけし】

■授業科目 漢文学  
■専門・専攻領域 漢文学  
■最終学歴 大東文化大学大学院文学研究科中国学専攻博士課程後期課程 修了  
■学位 博士（中国学）



研究内容・教育方針

研究内容：中国・南北朝隋唐時代の学術について、(1)『漢書』注釈書の受容、(2)礼（主に服喪儀礼）に関する議論、(3)『家学』の発生と展開を中心に研究を進めている。(1)では『史記』三家注・『後漢書』李賢注・『文選』李善注といった注釈書や敦煌本の『漢書』注・日本に現存する旧抄本に引かれる旧来の『漢書』注釈と『漢書』顔師古注（現在最も標準的な『漢書』注釈）とを比較することで、顔師古注が旧来の注釈に取って代わって広く受容されるようになった理由について、(2)では礼に関する議論の分析を通じて当時における経書の受容について、(3)では礼学を家学とする一族を世代順に検討することで家学の実態についてそれぞれ考察している。

教育方針：漢文学（中国古典学及び日本漢学）を研究するために必要不可欠な、文学・史学・哲学（思想）・文献学に関する幅広い知識と原典（古典中国語）読解力を習得し、自身の研究成果を学会発表や学術論文によって公表できるよう指導する。

### 業績

- 『漢書注釈書研究』（単著）（遊学社・2017年）
- 『中国史書入門 現代語訳 隋書』（共著）（勉誠出版・2017年）
- 『『朱子語類』訳注 巻八十四〜八十六』（共著）（汲古書院・2014年）

## 三宅 宏幸 准教授 【みやけ ひろゆき】

■授業科目 日本近世文学研究  
■専門・専攻領域 日本近世文学、読本  
■最終学歴 同志社大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程後期課程 修了  
■学位 博士（国文学）



研究内容・教育方針

研究内容：日本近世文学、特に曲亭馬琴を中心に近世中後期小説の生成について研究しています。また、近世前期に多く刊行された中国講史小説の翻訳（通俗軍談）の受容についても調査しています。近世の文藝は引用（本歌取りの手法やパロディを含む）が多く行われ、和漢の史実・説話・伝承・小説など様々な資料を用いて作品を描き出していきます。そこで、個々の具体的な事例を探り、作品がどのような過程を経て紡がれていくのか検証を加え、さらに、そのテキストを読んだ読者がどのように楽しむことが可能なかを考察するという研究を行っています。

教育方針：学生が疑問に感じたこと、興味を持ったことを精緻に検証するとともに、その検証が研究史の流れの中でどのような位置づけになるのかを把握するという、ミクロな実証技術とマクロな視野を獲得できるよう指導をしていきます。

### 業績

- 『好華堂野亭の戦記（図会もの）と通俗軍談』（『説林』65、2017年）
- 『宮本武蔵もの』実録の展開』（『読本研究新集』10、2018年）
- 『曲亭馬琴と木村黙老の関係』（『日本文学研究ジャーナル』7、2018年）

## 若松 伸哉 准教授 【わかまつ しんや】

■授業科目 日本近代文学研究  
■専門・専攻領域 日本近現代文学  
■最終学歴 青山学院大学大学院文学研究科日本語・日本文学専攻博士後期課程 修了  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

研究内容：日本近代文学、特に昭和期の文学を中心的な課題としている。昭和期に活躍した小説家・石川淳の作品研究から出発し、現在は太宰治など同時代の他の小説家の作品も大きな研究対象としている。研究方法は対象作品とかかわる同時代言説の探索から行い、作品が発表された当時に持っていた批評性を明らかにする方法を探っている。これは文学作品の歴史性・社会性を明らかにすることもであるが、作品に即したこうした具体的な研究の先に、文学作品という（虚構）が、現実社会に対して持ち得る力について考えることができればと思っている。そのため近年は、文学作品について現実的な規制・抑圧をかけてくる戦時下に発表された作品を中心に論文を発表している。

教育方針：具体的な作品に即した精緻な読解と、同時代言説の精査を基本作業として、作品の〈内〉と〈外〉から検討することを方針とする。そのうえで、学界にとって意味ある論文へと練り上げていくよう指導する。

### 業績

- 『歴史と文学のなかで―石川淳『森鴎外』における史伝評価』『日本近代文学』76、2007
- 『再生の季節―太宰治『富嶽百景』と表現主体の再生について』『日本近代文学』84、2011

## 上川 通夫 教授 【かみかわ みちお】

■授業科目 日本中世史研究特講、日本中世史研究  
■専門・専攻領域 日本中世史、ユーラシア世界の中の日本中世  
■最終学歴 立命館大学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期課程修了  
■学位 博士（文学）



研究内容・教育方針

6世紀から13世紀の範囲を視野に、東アジア世界ないしユーラシア世界との連動で推移した日本列島の政治社会史の特徴を捉える一方法として、仏教史に着目している。特に10世紀から12世紀の歴史過程に、日本文化の枠組を強く規定した中世仏教が一旦成立したという仮説を抱き、実態解明を進めている。当面の課題は“日本中世における普遍思想の発見”についての歴史像を提示することである。歴史研究は、著しく主体的な知的営みであると思う。与えられた課題や指示された勉強は、自らの研究にはごく一部を占める助言に過ぎないと位置づけてほしい。真理探究の人間的精神、学問と先学への尊敬、史料に沈潜する知的忍耐力、骨身に染み込ん人生体験と研究活動との結びつけ、人間存在の本質的理由を問う姿勢、未来への価値理想に照らした過去への探究心、これらのことは自分の身を以て学び取るしかない。事実検証の自己目的化や、独断的結論を前提とする歴史の利用などではない、志（こころざし）に突き動かされた史実探究の実践を、授業方針としたい。

### 業績

- 単著『日本中世仏教形成史論』（2007年、校倉書房）
- 単著『日本中世仏教史料論』（2008年、吉川弘文館）
- 単著『日本中世仏教と東アジア世界』（2012年、瑞香房）
- 単著『平安京と中世仏教』（2015年、吉川弘文館）

## 本橋 裕美 准教授 【もとはし ひろみ】

■授業科目 日本古代文学研究  
■専門・専攻領域 日本古代文学、物語文学  
■最終学歴 一橋大学大学院言語社会研究科博士課程修了  
■学位 博士（学術）



研究内容・教育方針

研究内容：平安時代の物語を中心とした文学研究。特に、文学に関わる皇族女性について幅広く分析している。中でも、皇族女性が祭祀の役割を担った「斎宮」というシステムについて深く研究しており、奈良時代から鎌倉時代までの斎宮および斎宮の登場する文学について扱う。斎宮制度は、皇族女性が都を離れて伊勢へ行き、祭祀というかたちで王権に関わるものである。物語の作り手や読み手、また斎宮自身の自己イメージにも耳を傾け、物語と現実の往還について考えている。

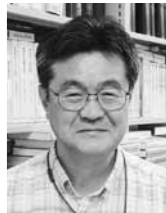
教育方針：表現にこだわった研究をすること、一方で表面にあらわれないものにも意識を向けることを求めたい。古典文学は、名もない人々の関わりの蓄積があって初めて現在に触れられるものである。そして、私たち研究者も名もない人々の一人となるかもしれない。文学の内外にあるそうした痕跡を忘れずに、そしてそこにあるテキストに対して真摯に向き合う研究者を育成していきたい。

### 業績

- 『齋宮の文学史』翰林書房、2016年
- 『母を看取る后―『源氏物語』紫の上の幽禁と明石の中宮―』（『むらさき』第52号、2015年12月）
- 『龍に成る后―井上内親王をめぐる規範の攻防』の表現を中心に―』（『物語研究』第16号、2016年3月）

## 大塚 英二 教授 【おおつか えいじ】

■授業科目 日本近世史研究（博士前期）、日本近世近代史研究特講（博士後期）  
■専門・専攻領域 日本近世史、農村社会論、地域研究、治水研究  
■最終学歴 名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、1986年  
■学位 博士（歴史学、名古屋大学）1994年



研究内容・教育方針

日本近世の地域社会を様々な角度から分析しています。1つの柱は地域金融論で、頼母子講や寺社祠堂金、百姓相对金融などによって構成される地域の信用構造について検討しています。2つ目の柱は山入会関係の地域秩序論で、主に山間部の入会紛争の史料を扱い、「山元」「有力百姓」を中心とした地域秩序からの転換のありようを検討しています。3つ目の柱は水利秩序関係論で、平場の用水系の構造変化について検討しています。当面は、以上の3つの柱をもとに、近世社会における地域秩序のあり方を総合的に捉えることを目標にしています。なお、院生には、史資料を徹底的に読み込んで自分なりの歴史像を提示できるよう指導したいと考えています。それは、歴史を言説としての解釈にとどめるのではなく、事実（過去）を大切にしながら現実社会と切り結ぶ方法論の錬磨となるでしょう。とともに歴史学徒として学び合うようなゼミにしたいものです。

### 業績

- 『日本近世農村金融史の研究』（単著）校倉書房、1996年
- 『新体系日本史3 土地所有史』（共著）山川出版社、2002年
- 『日本近世地域研究序説』（単著）清文堂出版、2008年
- 『近世尾張の地域・村・百姓成立』（単著）清文堂出版、2014年

## 丸山 裕美子 教授 【まるやま ゆみこ】

■授業科目 日本古代史研究／日本古代史研究特講  
■専門・専攻領域 日本古代史、日唐比較文化研究、古代祭祀制度研究  
■最終学歴 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得退学  
■学位 東京大学 博士（文学）



研究内容・教育方針

日本古代、7・8世紀～11世紀の制度史・文化史を研究している。主な研究の柱は、(1)日唐律令制の比較研究、(2)日本古代祭祀研究、(3)日本古代における漢籍の受容に関する研究、の3つである。(1)は医療令（医療制度・医学教育）・假寧令（休暇制度）を中心に、(2)は祭祀制度と天皇制との関わりを、(3)では『書儀』と称される一種の百科全書典籍の受容の問題を考究している。以上の他、日本古代の基本的文献の注釈（『続日本紀』『延喜式』『御堂関白記』、聖武天皇筆『雑集』、正倉院文書など）も行なっている。また県大赴任以来、機会を得て、東海地域の古代史研究も少しずつ続けている。教育方針としては、個々の学生の史料読解力、分析力を高めることができるよう手ほどきし、研究テーマに即して適切な先行研究を紹介し、その上で論理的な論文を完成させ、レフリーつきの学会誌に投稿することができるように指導したいと考えている。

### 業績

- (単著)『日本古代の医療制度』名著刊行会、1998年
- (単著)『正倉院文書の世界』中央公論新社(中公新書)、2010年
- (共著)『日本の歴史』08『古代天皇制を考える』講談社、2001年(講談社学術文庫、2009年)
- (単著)『清少納言と紫式部―和漢混濁の時代の宮の女房』山川出版社(日本史リブレットA、2015年)

## 中西 啓太 准教授 [なかにし けいた]

■授業科目 日本近現代史研究  
 ■専門・専攻領域 日本近現代史 地方行政財政研究 地域社会研究  
 ■最終学歴 東京大学大学院人文社会系研究科  
 日本文化研究専攻(日本史学) 博士課程修了  
 ■学位 博士(文学)



研究内容・教育方針  
 研究内容：戦前における基本的な地方制度が、行政の現場となる地域社会においてどのように機能したのか、そのために国と地方との間ではどのような相互作用があったのか、という点に注目し、特に明治中後期から大正期にかけての時期を分析しています。そこから派生して、地域社会と企業との間にはどのような関係が結びついていたのか、特に非都市部における変化を取り上げたり、財政面における寄付金の位置づけを検討したりと、研究を広げています。  
 教育方針：大学院においては、学生の関心に合わせながら、関連する先行研究と一次史料との間を往還し、専門を広げ・深めることを重視しています。また、研究成果を積極的に外部の研究会や学会、学術誌において公表することを促し、アドバイス・指導を行います。

### 業績

- 『所得調査委員と日露戦後の地域社会』『史学雑誌』120-4、2011
- 『町村「自治」と明治国家』山川出版社、2018
- 『明治期における監獄の経済史的な位置づけ』萩山正浩・佐藤健太郎・山口道弘(編著)『公正から問う近代日本史』吉田書店、2019

## 樋口 浩造 教授 [ひぐち こうぞう]

■授業科目 日本思想史研究  
 ■専門・専攻領域 日本思想史、思想史文化理論  
 ■最終学歴 大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学  
 ■学位 修士



研究内容・教育方針  
 現在の関心：  
 ①東アジア、特に中国の戦争の記憶表象に関する日中比較研究のための、調査及び資料収集。  
 ②日本国内、また愛知県内の戦争遺跡及び戦争記念館の調査。  
 これらのことを通じて、ナショナリズムに関する、フィールドワークと思想的テキストとの交差点に立脚した日本の戦後の思想的考察を目指している。  
 教育方針：大学院の授業では、思想的テキストの一次資料を読み進めることを基本にします。近現代の思想史に関するものであれば、話し合っ、洋の東西を問わず、できるだけ希望するもの、読み応えのあるものを取り上げていきます。

### 業績

- 『ナショナリズムと日本文化論—「文化」の境界を越えるために』2012
- 『江戸』の批判的系譜学—ナショナリズムの思想史』ベリカん社 2009
- 『日本ナショナリズム批判—帝国の時代の知の可能性として』『季刊日本思想史』71 2007

## 柴田 陽一 准教授 [しばた よういち]

■授業科目 日本地域研究  
 ■専門・専攻領域 人文地理学、地理思想史、中国地域研究  
 ■最終学歴 京都大学大学院文学研究科博士後期課程  
 行動文化学専攻単位取得退学  
 ■学位 博士(文学)



研究内容・教育方針  
 研究内容：人文地理学、特に地理思想史の研究をしています。  
 最初は、戦前日本における地政学を受容と展開について研究していました。そこから徐々に関心が広が、現在では(近代日本の空間編成・空間認識)をテーマとして研究を進めています。様々な地理的知(風景論、景観論、郷土研究、観光、探検・冒険、都市計画、国土計画、地政学など)が各時代と地域の文脈の中で果たした役割の検討を通じて、現代の私たちが生活する空間がいつどのように生み出されたかを明らかにしようとしています。  
 教育方針：「好きこそものの上手なれ」という言葉があります。大学院に入学する人は、とにかく熱中できる何か好きなのがなくはないと思います。しかし好きだけではダメで、それを(研究)として説得力のある形で発信するには、学問的な手続きを踏まなくてはなりません。大学院で身に付けるべきものは、そのノウハウだと思っています。それを丁寧に指導していきます。

### 業績

- 『帝国日本と地政学：アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践』清文堂出版、2016
- 『日本における訳語「地政学」の定着過程に関する試論』『現代思想』45-18、2017
- 『孫文「建国方略」における「東嶺」と吉林省松原市のアイデンティティ』『孫文研究』57、2015

## 川畑 博昭 教授 [かわばた ひろあき]

■授業科目 日本法政治研究  
 ■専門・専攻領域 憲法学、比較法(史)研究・スペイン/イペロアメリカ法研究・平和法制研究  
 ■最終学歴 名古屋大学大学院法学研究科  
 法律・政治学専攻単位取得退学  
 ■学位 博士(法学)



研究内容・教育方針  
 授業担当者は、イベリア半島や南米の国々を研究のフィールドに据え、法と政治の領域に跨る比較憲法学の見地から、大統領制あるいはその歴史的形態としての共和制を中心に研究を行ってきた。こうした比較研究は即座に日本研究へと直結するものではないが、外国研究から得られる相対的かつ比較的な知点は、日本の憲法政治の本質に肉薄するために必要不可欠な研究方法の一つであり、自らの研究においても、このことを常に意識してきた。本演習においては、こうした担当者の専門を最大限に活用しつつも、演習の主軸は日本の法や政治の基礎的知識の獲得に置かれている。いわゆる日本政治の枠組みを成す憲法の制定過程や戦後日本政治の特徴といった実態面と併せて、理論的基礎力の習得を目指している。そして、受講者がこれまでにある程度の知識を得ていることがらについては、外国語文献を取り入れ精読することを試みるが、これは、対象の内在的把握を豊富にし、かつ充実化するものとして理解して欲しい。

### 業績

- 『共和制憲法原理のなかの大統領中心主義—ペルーにおけるその限界と可能性—』(日本評論社、2013年)
- 『(異形)の法の継受—スペイン領グラン・カナリア島の日本国憲法9条にふれて—』『名古屋大学 法政論集』第272号(2017年)
- 『ペルー社会の「憲法化」と憲法裁判の可能性——21世紀ラテンアメリカの憲法状況を見定めるための一つの傾向』辻村みよ子責任編集『憲法研究』2号(2018年)

## 井戸 聡 准教授 [いど さとし]

■授業科目 日本社会研究  
 ■専門・専攻領域 社会学 地域・文化・観光・環境  
 ■最終学歴 京都大学大学院文学研究科博士後期課程退学  
 ■学位 博士(文学)



研究内容・教育方針  
 地域社会の生活世界における社会文化的諸問題について研究を進めてきた。環境についての社会問題(生活環境変化とそれへの対応)から始まり、観光(観光開発やそれによる地域社会変容)や地域文化(伝統文化や民俗文化)などの関連する事項についてと研究対象の幅を広げてきた。  
 地域社会研究にはいろいろな手法があるが、現場(フィールド)をたずね、そこから学ぶことが地域社会を知り、考える上で重要であるという立ち位置を確保しながら、どのような理解や思考が可能であるかを試行錯誤しながら共に考えてゆきたいと考えている。

### 業績

- 『地域社会の共同性の創出—徳島県の環境問題の経験から—』『ソシオロジ』43(3)、1999
- 『リゾート期における村の選択—湖西の事例から—』『観光と環境の社会学』新曜社、2003
- 『神仏分離と文化破壊—修験宗の現代的悲喜』『国家と宗教』(上)、2008
- 『原生林』の誕生—「自然」の社会的定義をめぐって—『都市の憧れ、山村の戸惑い』晃洋書房、2017

## 服部 亜由未 准教授 [はっとり あゆみ]

■授業科目 日本地域史研究  
 ■専門・専攻領域 人文地理学、歴史地理学  
 ■最終学歴 名古屋大学大学院環境学研究科  
 博士後期課程修了  
 ■学位 博士(地理学)



研究内容・教育方針  
 近世・近代の産業を対象とし、地域の変容、様々な危機に対する産業従事者の対応について検討しています。これまで北海道鱈漁業を対象とし、漁獲量の激減に対する地域や人々の対応を、経営帳簿・漁夫名簿・日記等の史資料の分析や聞き取り調査をもとに検討してきました。また、織物業や農業についての研究を進めています。院生には、時間と空間の両視点から、地域を立体的に考えることができるよう指導していきたいと考えています。なお、日本には、その土地もしくは遠く離れた結びつきのある土地の歴史を伝える史資料が、各地に眠っています。それらを丁寧に読み解くことで、新たな事実の発見にもつながります。GISを用い、史資料から得られる情報を地図化し、分析することも一つの方法です。フィールドワークを重視し、各地に残っている史資料を探し、そこから見いだされる新たな地域像を、一緒に読み解いていきたいと思っています。

### 業績

- 『古地図で楽しむ尾張』(共著) 風媒社、2017年
- 『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 資源と生業の地理学』(共著) 海青社、2013年
- 『歴史と環境—歴史地理学の可能性を探る』(共著) 花書院、2012年

# 多文化共生研究所

多文化共生研究所は、大学院国際文化研究科附置の研究所です。2009年に設置され(2008年に実質的な活動開始)、現在、36名の専任教員、2名の名誉教授、8名の客員共同研究員により構成されています。

本研究所は、本学の理念のひとつである「自然と人間の共生、科学技術と人間の共生、人間社会における様々な人々や文化の共生を含む『成熟した共生社会』の実現を見据え、これに資する研究と教育、地域連携を進める」を実践する機関として設立されました。「多様な分野の研究者が連携して、総合的な意味での『共生』をテーマとして、研究と実践に取り組んでいく」ことを目的として、諸活動に取り組んでいます。

おもな活動として、多彩な研究行事の開催が挙げられます。多文化共生や国際交流、異文化理解などに関わる行事を主催しています。外部資金や学外共催団体を伴い、海外からゲストを招聘する大規模なシンポジウムなどを開催することもあれば、小規模の研究会を行うこともあります。ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米などの地域研究に関する専門家を招聘した時は、授業と合同の行事開催をすることで、大学院教育の充実にも寄与しています。2016年から、お弁当持ち寄り可の研究紹介の場「ランチセミナー」を定期開催しており、学生たちにも好評です。

もうひとつの活動の柱は、定期刊行物の出版です。毎年度末に『共生の文化研究』(創刊2008年、現在13号まで刊行)を刊行しています。研究所員による論文寄稿のほか、特集も生まれ、その年度ごとに学内で集中的に取り組まれた研究や教育実践の動向を反映させています。大学院生が執筆した論文や書評の投稿も奨励しており、研究業績を積むための場として活用されています。

こうした活動を通じ、学内および地域における多文化共生の理念の共有を図っていることが成果であり、特色であると言えます。今後とも大学院教育との連携をいっそう図ることにより、さらなる人材育成、研究成果発信、社会貢献を目指していきます。



研究所の定期刊行物『共生の文化研究』



フランスからのゲスト講師を招いた公開講演会



「ペルー民族舞踊マリネラを踊ってみよう！」の講義・実践会の風景



## 令和2年度 | 国際文化研究科の入試日程

秋 季	
試 験 日	令和元年10月5日(日)
出願期間	令和元年9月2日(日)～9月9日(日)
合格発表	令和元年10月17日(日)
募集要項 配布予定	7月中旬

春 季	
試 験 日	令和2年2月15日(日)
出願期間	令和2年1月6日(日)～1月14日(日)
合格発表	令和2年2月27日(日)
募集要項 配布予定	11月下旬



**愛知県立大学**  
Aichi Prefectural University

〒480-1198(個別郵便番号)  
愛知県長久手市茨ヶ廻間1522番3  
☎0561-76-8824(直通)  
FAX 0561-64-1105  
URL <http://www.ics.aichi-pu.ac.jp>

